

八幡山横穴群

—袋井の群集墳と横穴群を考える(2)—

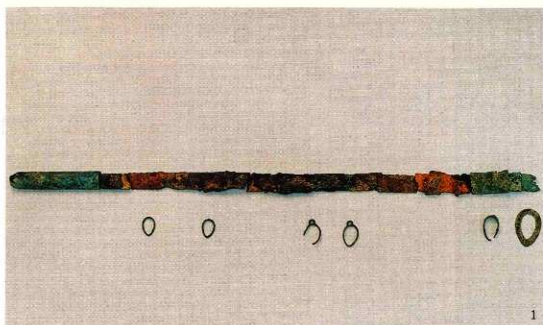


八幡山横穴群

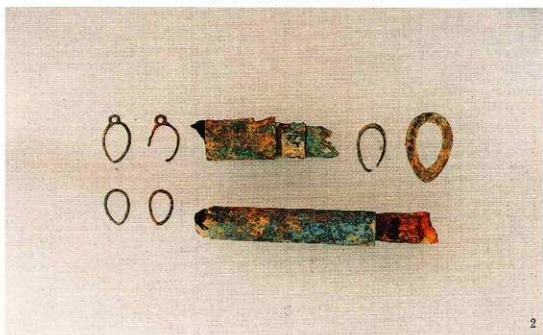
—袋井の群集墳と横穴群を考える(2)—

1997

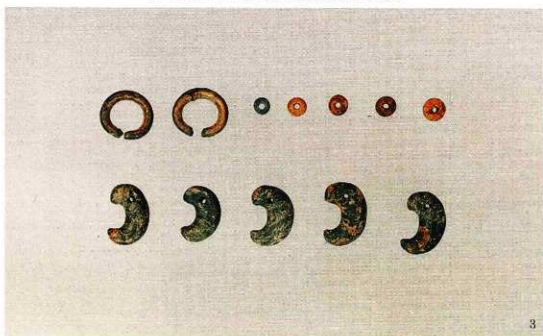
袋井市教育委員会



1. 八幡山3号横穴出土金銅装大刀



2. 八幡山3号横穴出土金銅装大刀（部分）



3. 道ヶ谷5号横穴出土耳環・玉類

例 言

1. 本書は、昭和41年度に袋井市教育委員会が実施した、八幡山横穴群^{はちまんやま}の発掘調査報告書である。なお、参考資料として八幡山横穴群周辺で発掘調査の行われた道々谷横穴B群、宇刈横穴N群、東別所古墳群の報告もあわせて掲載した。また第2集で報告した金山古墳群・横穴群のうちその後の遺物整理で3～5号墳とA4号横穴の一部資料を見つけだすことができたため、補遺として本書に掲載した。また、宇刈横穴N群については概報がすでに刊行されているが、本書をもって本報告としたい。
2. 現地発掘調査は大谷純仁・平野和男氏を担当者として実施した。
3. 本書刊行に係る事務については、袋井市教育委員会生涯学習課文化財係が行った。
4. 本書の編集・執筆は松井一明が、挿図・図版の作成・写真の撮影は松井・鈴木美恵子が行った。なお、八幡山横穴群の現地発掘調査の記録写真については、発見できず掲載できなかった。今後発見されたならば、次集以降の報告書で補足したい。
6. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
7. 本書作成にあたっては下記の方々にご教示、資料の提供を賜った。感謝いたします。(敬称略)
下津谷達男 大谷純仁 平野和男 伊藤通玄 後藤健 柴田 稔 白澤 崇 戸塚和美
井村広巳 松本 一男 前田庄一 永井義博 大島慎一 塚本和弘

目 次

第1章	はじめに	1
第2章	袋井市域における後期古墳群の様相	2
第3章	八幡山横穴群	6
	i) 横穴の形態・遺物出土状況 ii) 遺物 iii) 小結	
第4章	道ヶ谷横穴B群・北の谷横穴出土遺物	18
	i) はじめに ii) 横穴の形態・遺物出土状況 iii) 遺物 iv) 北の谷横穴出土遺物 v) 小結	
第5章	宇刈横穴N群	30
	i) はじめに ii) 横穴の形態・遺物出土状況 iii) 遺物 iv) 小結	
第6章	東別所古墳群	41
	i) はじめに ii) 古墳の形態・主体部 iii) 遺物 iv) 小結	
第7章	補遺 金山古墳群・横穴群出土遺物	49
	i) はじめに ii) 遺物 iii) 小結	
第8章	袋井の横穴群を考える(2)	52
	i) はじめに ii) 横穴にみる階層性 iii) 遠江における横穴の地域色 iv) 遠江における後期群集墳・横穴群と交通路 v) まとめ	

挿 図 目 次

第1図	袋井地域の古墳時代の主要遺跡・古墳群分布図	3
第2図	八幡山横穴群位置図	7
第3図	八幡山横穴群平面図	8
第4図	1号・2号横穴実測図	9
第5図	3号横穴実測図	10
第6図	土器実測図1	13
第7図	土器実測図2	14
第8図	土器実測図3・鉄製品実測図1	15
第9図	鉄製品実測図2	16
第10図	道ヶ谷横穴B群位置図	19
第11図	道ヶ谷横穴B群平面図	20
第12図	B1号・B2号横穴実測図	21
第13図	B3号・B4号横穴実測図	22
第14図	B5号横穴実測図	23
第15図	土器実測図1	26
第16図	土器実測図2・鉄製品実測図	27
第17図	北の谷横穴山土器実測図	28
第18図	宇刈横穴群位置図	31
第19図	宇刈横穴群周辺地形図	32
第20図	宇刈横穴N群調査区域全測図	34
第21図	82号・85号横穴実測図	35
第22図	83号・84号横穴実測図	36
第23図	土器・鉄製品実測図	38
第24図	東別所古墳群位置図	42
第25図	東別所古墳群全体図	43
第26図	1号墳実測図	44
第27図	2号墳実測図	45
第28図	1号墳・2号墳主体部実測図	46
第29図	土器・鉄製品実測図	47
第30図	金山古墳・横穴群位置図	50
第31図	土器実測図	51
第32図	中・東遠江地域の横穴集成図1	56
第33図	中・東遠江地域の横穴集成図2	57
第34図	遠江における古墳時代後期の交通路復元図	61

写真図版

巻頭カラー図版 1. 八幡山3号横穴出土金銅装大刀 2. 八幡山3号横穴山土金銅装大刀(部分)
3 道ヶ谷5号横穴山土耳環・玉類

図版1 八幡山横穴群遺物写真(1)

図版2 八幡山横穴群遺物写真(2)

図版3 八幡山横穴群遺物写真(3)

図版4 1. 道ヶ谷B1～3号横穴(南より) 2. 道ヶ谷B4～5号横穴(南より) 3. 道ヶ谷B1～3号横穴(西より)

図版5 1. 道ヶ谷B1号横穴(南より) 2. 道ヶ谷B1号横穴内部(北より) 3. 道ヶ谷B1号横穴(北より)

図版6 1. 道ヶ谷B1号横穴調査風景(南より) 2. 道ヶ谷B2号横穴(南より) 3. 道ヶ谷B2号横穴内部(鉄刀出土)

図版7 1. 道ヶ谷B2号横穴内部(須恵器出土) 2. 道ヶ谷B4号横穴(南より) 3. 道ヶ谷B4号横穴閉塞石(南より)

図版8 1. 道ヶ谷B4号横穴内部(南より、小溝あり) 2. 道ヶ谷B5号横穴(南より)
3. 道ヶ谷B5号横穴閉塞石(南より)

図版9 道ヶ谷横穴B群遺物写真(1)

図版10 道ヶ谷横穴B群遺物写真(2)

図版11 北の谷横穴遺物写真

図版12 1. 宇刈横穴N群遠景(西より) 2. 発掘調査前(西より) 3. 宇刈横穴N群全景(東より)

図版13 1. 宇刈横穴N群全景(南より) 2. 宇刈横穴N群全庭部埋土断面(南より) 3. 宇刈82号横穴(南より)

図版14 1. 宇刈83号横穴(南より) 2. 宇刈83号横穴壁面(削只痕が見られる) 3. 宇刈85号横穴(ミニ横穴、南より)

図版15 1. 前庭部土器出土状況(東より) 2. 前庭部土器(Na9)出土状況 3. 発掘調査風景(東より)

図版16 宇刈横穴N群遺物写真

図版17 1. 東別所1号墳主体部 2. 東別所1号墳主体部出土鉄製品(鉄鉢?) 3. 東別所1号墳遺物写真

八幡山横穴群発掘調査報告書

第1章 はじめに

袋井市の遺跡数は現在判明している限りで約300箇所を数え、その内6割以上が横穴群・群集墳となっており、静岡県下でも屈指の古墳群を内包する地域となっている。さらに、大門大塚古墳や川会坊主山古墳、石ノ形古墳などの地域の中小首長墳も存在していることから、こうした首長墳から横穴群や群集墳の成立を考えるうえでも興味深い地域となっている。今回発掘調査報告を行う八幡山横穴群は太田川中流域に位置しており、付近には総数100基を越えると目される大横穴群である宇刈横穴群（N群本書掲載）のほか、学史的に有名なズン坂横穴群、道ヶ谷横穴群（本書掲載）、北の谷横穴群（遺物本書掲載）などが帯状に分布しており大横穴群地帯を形成している。近年では川田古墳群の発掘調査において6世紀前半代を中心とする初期群集墳が発見され、本書に掲載した東別所古墳群とともに袋井市の初期群集墳を語るうえで資料の蓄積が進んできている地域ともなっている。

八幡山横穴群は現在の東名高速道路袋井インターチェンジ東500mの位置に展開する丘陵の南斜面に位置しており、地番は袋井市堀越字八幡ヶ谷115番地内である。また、隣接する西側の谷奥には、総数20基以上を数えると思われるズン坂横穴群も分布していることから、あるいは八幡山横穴群もズン坂横穴群の1小単位群と捉えることも可能であろう。太田川中流域東方に展開する丘陵は、大日砂層と呼ばれる火山灰再堆積層から形成されており、横穴掘削には格好の条件を備えており、当地域が横穴群が盛行する一つの原因ともなっている。太田川西岸に展開する磐田原洪積台地においては、磐田原礫層と呼ばれる旧天竜河川堆積物がベースとなっているため、川原石積みの横穴式石室を主体部とする後期群集墳が多数分布している。

発掘調査は当時提出された発掘届によると3基の横穴墓が、1966年3月16日から3月22日の僅か1週間でなされ、まさに緊急発掘調査と呼べるものであった。調査原因は当時の記録によると採土工事中に偶然発見されたことから、緊急発掘調査の運びとなった。遺跡の発見届は屈出人袋井市教育長名で昭和41年3月14日付けで県教育長宛て届けている。また、発掘調査は担当者を大谷純仁・平野和男両氏に依頼し、昭和41年3月10日付けで発掘届を県教育長宛て提出している。

当時の新聞記事によると市教育委員会の職員ばかりでなく、地元中・高校生、国学院大学生や遼江考古学研究会のメンバー等の多数の人々が発掘調査に参加し、無事終了することができたと報じられている。3号横穴から金銅装の装飾大刀が出土したこともあってか、当時としては昭和37年に発掘調査がなされた地蔵ヶ谷横穴群の調査と共にかなり注目された横穴群となっていたようである。

このように困難な状況下、しかも短期間で発掘調査が完了したことは、当時の市教育委員会の迅速な行動とともに、発掘調査担当者を引き受けていただいた大谷純仁・平野和男両氏と、今となっては御芳名すら知ることはできない多くの発掘調査参加者の努力に負うところが非常に大きなものであった。また、袋井市における発掘調査のなかでもかなり古い時期に属するにもかかわらず、調査担当者の努力もあって、資料の大部分が散逸しないで地元に残されていたことも幸運であった。今回、このように袋井市の古墳時代を語るうえで欠くことのできないといわれてきた八幡山横穴群の発掘調査報告の責任を30年ぶりに果たせることを感謝するとともに、現在からは想像もできない困難な埋蔵文化財行政下で、調査の遂行と資料収集に努力された関係者のご苦労と情熱に敬意を払いたい。

第2章 袋井市域における後期古墳群の様相

冒頭でも述べたように太田川東岸地域は遠江でも屈指の横穴群が分布しており、本書の報告内容も横穴群が主となるため、本章ではまず袋井市域の首長墓の分布を整理し、つぎに古墳時代後期の集落遺跡と古墳群の相関関係を中心に概説してみたい。

まず、古墳時代後期以前の袋井市周辺地域の首長墓群の状況を第1図で検討してみると、いくつかの集中地域があることがわかる。まず南地区では古笠西池南に展開する小笠山西北山麓に位置する全長40mクラスの前方後円墳になる高尾向山6号墳(56)、近年の調査で豊富な鉄製武器・武具を出土した全長30mの方墳になる五ヶ山B2号墳(52)を始めとして、貫名地A3号墳(55)や貫名地B1号墳(54)のような全長30mクラスの前方後円墳、径30mクラスの円墳と思われる観音山古墳(53)など小規模の首長墓群が見られる。何れも5世紀後半から6世紀前半にかけての成立と思われ、5世紀後半出現した豪族居館と目される古新田遺跡(78)との関係が注目されている。これらの首長墓は半径2km以内の狭い地域に分布することから、小笠山西北山麓首長墓群とグルーピングしておきたい。

つぎに古笠西池よりも北方の段丘及び原野谷川が形成した沖積平野さらにはその北方の丘陵地にいくつかの首長墓が発見されてきている。前期古墳としては全長50mの前方後円墳と目される座上権現神社古墳(65)が北方の丘陵地に、沖積平野では現存していないが全長50mクラスの前方後円墳になると推定される久努人塚古墳(62)、古笠西池北の段丘上には全長40mクラスの前方後円墳になる狐塚古墳(61)、直径30mクラスの円墳である大門大塚古墳(59)などが分布している。5世紀代の古墳としては前半が久努人塚古墳、後半が狐塚古墳、6世紀前半では大門大塚古墳の築造が考えられ、前期～後期に首長墓の連続性があり、これら首長墓の築造はあたかも時代を追うごとく南下する状況である。しかし、各首長墓の位置関係をみると各古墳がやや離れ過ぎているきらいがあるため、座上権現神社古墳・久努人塚古墳と狐塚古墳・大門大塚古墳との間には系譜的断絶が想定されるかもしれないが、とりあえずこれらをまとめて原野谷川中流域首長墓群とグルーピングしておきたい。

東部域に目を転ずると和田岡原及びその周辺地域で首長墓群がみられる。和田岡原では4世紀末築造と推定される瓢塚古墳(73)、5世紀前半築造の各和金塚古墳(72)、5世紀中頃の古岡大塚古墳(76)の一連の系譜がたどれる全長60mクラスの前方後円墳である中規模首長墓が分布する。同じ和田岡原でも5世紀中頃以降になると径30mクラスの円墳である春林院古墳(75)や、全長40mクラスの行人塚古墳(74)など小規模首長墓が出現し、古墳の小形化が見られる(松井・明 1992)。これらの首長墓は瓢塚古墳中心としていずれも半径2km以内に分布していることから、和田岡原首長墓群としてグルーピングしておきたい。

和田岡原首長墓群の南方、原野谷川に面した丘陵上にいくつかの首長墓が見られる。近年調査がなされ豊富な武器・武具・馬具・銅鏡等が出土した直径20mクラスの円墳である石ノ形古墳(67)、全長30mクラスの前方後円墳である権現山古墳(69)、全長20mクラスの前方後円墳である宇佐八幡境内1号墳(68)、直径10mクラスの造出付円墳である原川古墳(77)などが見られる。その他現存していないが権現山古墳と同クラス浅間山古墳(70)が存在していた。築造時期は石ノ形古墳は5世紀後半、権現山古墳は5世紀末、宇佐八幡境内1号墳は6世紀初頭、原川古墳は6世紀前半となり、小規模首長墓群ではあるが一連の系譜が連れる首長墓群である。いずれの首長墓も半径2km以内に所在しており、和田岡原首長墓群とは別系譜のものと考え和田岡原南方首長墓群とグルーピングしておく。

このようにいくつかの首長墓群をグルーピングしてみたが、八幡山横穴群周辺部の首長墓と思われる古墳を検討すると、全長20mクラスになると思われる帆立貝式前方後円墳の道ヶ谷9号墳(66)が



第1図 袋井市域の古墳時代の主要遺跡・古墳群分布図

ある程度である。その他、全長20mクラスの前方後円墳と思われる東山6号墳(64)、東別所1号墳(63)等も分布するものの、いずれも初期群集墳の構成古墳と見られるもので、八幡山横穴群周辺域に一連の系譜の通れる首長墓群は存在しない。おそらく、袋井市域で盛行する5世紀後半代の首長墓群が近世東海道に面した位置に分布する傾向から見て、首長墓域として注目されなかったことがその原因かと思われる(白澤崇 1993)。この傾向は太田川上流域の森町域でも同様である。

さらに、横穴群の分布について検討を進めたい。袋井市域での100基を超える大規模横穴群は、宇刈・春岡横穴群(33・35)と菅ヶ谷横穴群(38)が筆頭にあげられる。これらの横穴群の半径2km以内には古墳時代後期の有力遺跡群が分布することが、近年の調査で判明しつつある。すなわち、古墳時代後期の豪族居館と考えられる遺構が発見された坂尻遺跡(88)を中核として、不入斗I遺跡(89)、石ノ形遺跡(90)、久津部遺跡(86)、岡本遺跡(87)などの原野谷川中流域北岸の自然堤防上に展開する遺跡群が見られる。これらの遺跡群の墓域として菅ヶ谷横穴群が位置づけられよう。

いっぽう、宇刈・春岡横穴群の関連集落は鼻欠淵遺跡(96)、三沢遺跡(97)などの宇刈川流域の遺跡群と稲荷領家遺跡(99)、春岡遺跡(98)などの太田川中流域東岸の自然堤防上に立地する遺跡群が想定される。なかでも稲荷領家遺跡は規模の大きくなりそうな古墳時代後期集落である。さて、これら集落のうち奈良時代になると坂尻遺跡では佐野郡衙、稲荷領家遺跡では周智郡衙?(「知」墨書出土)が設置される。このことから、この両遺跡は郡衙設定の下地となったと思われる古墳時代後期段階においては、すでに有力者集団(後の郡司クラス)が居住した集落であったと理解される。すなわち、大規模横穴群の関連集落の実態は、奈良時代において郡衙として機能するような有力集落(中核集落)を中心として4〜5箇所程度の遺跡群からなるものと理解されるのである。

総数20〜30基を数える中規模横穴群としては、八幡山横穴群を含むズン坂横穴群(26)、地藏ヶ谷横穴群(16)、愛野向山横穴群(20)あるいは掛川市岡津横穴群(41)などがあげられる。ズン坂・八幡山横穴群に対応する集落としては、半径2km以内の範囲で探すと太田川中流域東岸の自然堤防上に立地する上橋・玉越遺跡(83)や堀越遺跡(84)がもっとも有力視される。

地藏ヶ谷横穴群については段丘上の掛之上遺跡(81)や原野谷川中流域北岸の自然堤防上に立地する袋井宿遺跡などが注目される。しかしながら、古等西池が形成された谷部奥には総数100基を数えるであろう袋井市唯一の大規模後期群集墳である長者平古墳群(8)が存在しており、長者平古墳群の規模からみて大門I遺跡(80)や柳原遺跡(79)ばかりでなく掛之上遺跡も長者平古墳群の関連集落となる可能性が高い。とするならば、地藏ヶ谷横穴群の関連集落はおそらく袋井宿遺跡だけでなく原野谷川中流域南岸の自然堤防上、とくに小野田の集落付近の古代・中世遺跡とされる掛之上II遺跡あたりが該当すると推測しておきたい。同様に、愛野向山横穴群についても明確な関連集落としては下買名遺跡をあげたいが、横穴群の規模からみて下買名遺跡の付近の自然堤防上に関連集落が発見される可能性が非常に高いだろう。岡津横穴群については原野谷川東岸・逆川北岸の自然堤防上に位置する原川遺跡(100)、三ツ池・善光寺遺跡群(101)などの一連の集落群が該当しそうである。

以上のように中規模横穴群についての関連遺跡を検討すると、2〜3箇所程度の遺跡群からなる墓域として設定されていることが理解される。また、これら遺跡群の中には、横穴群がいずれも10〜20単位程度の小単位群がみられることや、飾り大刀などの優秀な副葬品をもつものを含むことからみて、大規模横穴群・群集墳にみられた豪族居館を内包する中核集落である坂尻遺跡や稲荷領家遺跡、大門I・掛之上遺跡に準ずるような有力集落を含むと推測しておきたい。

最後に総数10基にも満たない小規模横穴群について検討してみたい。小規模横穴群の代表としては今回報告した道ヶ谷横穴A・B群(30)、北の谷横穴のほか、金山A・B横穴群(13・19)、山本

山横穴群(10)、掛川市では碗貸横穴群(42)、味噌ヶ谷横穴群(51)などがあげられる。いずれも小規模横穴群であるため集落を特定することは困難であるが、味噌ヶ谷横穴群などはごく至近距離に味噌ヶ谷遺跡が存在し関連集落として注目される。

道ヶ谷A・B横穴群、北の谷横穴群についても半径2km以内に特持Ⅰ・Ⅱ遺跡(93・94)や鶴松遺跡(92)などさほど規模の大きくない遺跡が存在しこれらが対応してくると思われる。

金山A・B横穴群については至近距離に愛野向山横穴群や長者平古墳群が存在するため、それらの関連遺跡との整理がつかない。愛野向山横穴群と共に今後の資料の増加まちといったところである。

小規模横穴群については多くても2～3小単位で構成されること、周辺に大規模集落群がみられないことからみて、1～2集落に対する墓域として設定されている可能性が高いと思われる。また小規模横穴群成立の条件としては、関連集落のもつ食物生産の規模が小さいことや、単純に大・小規模集落群から隔離し地理的条件から大規模集落になりえなかったことなどが考えられる。

以上のように多少推測をまじえて袋井市周辺域の横穴群と関連遺跡を検討してみたが、構成される基数と小単位群の規模からみて大・中・小の3つの規模からなる横穴群があることがわかった。さらに、関連遺跡群も豪族居館を含みそうな大規模なものから、2～3箇所程度の遺跡群からなる中規模程度の遺跡群、1～2箇所程度の遺跡群からなる小規模な遺跡群の3ランクにおおむねわけられた。ただし、小規模と中規模の間には中間規模のものも小數存在しているので単純にはいかない。

さて横穴群・群集墳のランクが生じた原因を考えてみると、遺跡群を束ねる有力集落を含むいかにか、大規模集落群を出現させた食物生産の規模を高めた地理的条件、集落群間を結び物流の要となる交通ルートの問題点が絡んできていると思われる。とくに畿内と関東を結ぶ物流の權益に関係した交通ルートの問題がクローズアップされてきている(松井一明 1996)。すなわち、遠江において大規模群集墳や横穴群とその関連集落の位置関係を検討してみるならば、ひとつには(ルート1)近世東海道沿いに展開する集落群と横穴・群集墳(浜松市平田山古墳群～磐田原古墳群南半部～袋井市長者平古墳群～菅ヶ谷横穴群～掛川市人谷代横穴群～菊川町山本・大淵ヶ谷横穴群)、もうひとつ(ルート2)には浜名湖北岸をとおり稲荷領家遺跡から掛川市域にいたるルート(都田川流域古墳群～浜北市北麓古墳群～豊岡村古墳群～袋井市宇刈・春岡横穴群～掛川市楠ヶ谷横穴群～掛川市飛鳥横穴群)の2ルートが存在したことが想定される。ちなみにこの2ルートは、遠江における奈良時代の郡衙の位置関係を検討してみるとほぼ重なってくることが示唆的である。

このように遠江における大規模群集墳・横穴群の分析は関連集落群の抽出が可能であるとともに、集落群間の交通ルートの解明をなしえると思われる。以上の想定が正しいかどうかは中・東遠江の横穴の地域色の動向、横穴群地帯に横穴式石室の群集墳等が成立する現象とも関係があると思われ、これらの問題点については第8章にてさらに考察を深めたい。

第3章 八幡山横穴群

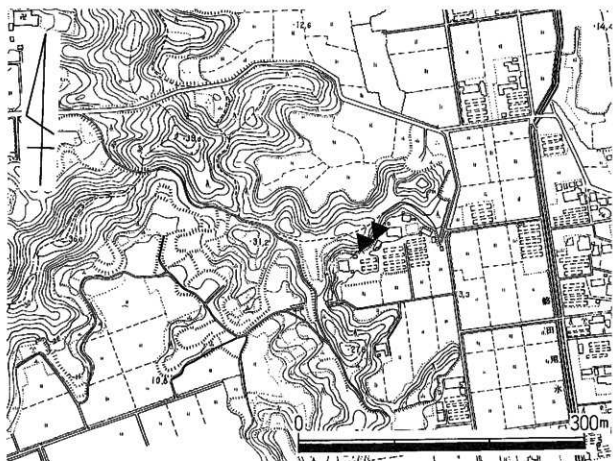
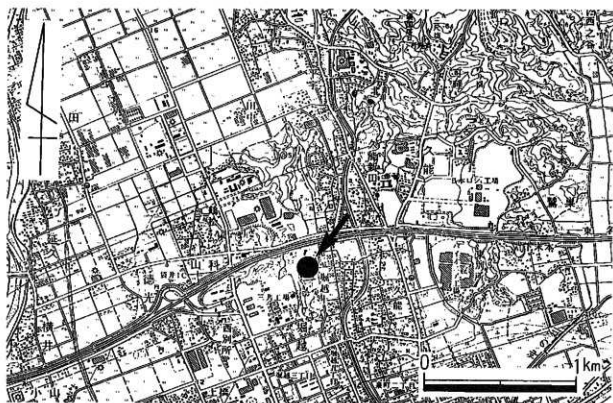
1) 横穴の形態・遺物出土状況

単位群・墓前域 八幡山横穴群は方形に斜面を切り出した一つの墓前域を共有する3基の横穴からなる最小単位の横穴群である。第2章で記述したとおり位置からみてズン坂横穴群に含まれるものと考え、この考えが支持されるならばズン坂横穴群の1支群になるとおもわれる。ちなみに、金山横穴群の報告書(袋井市教育委員会 1996)で示しておいた古墳群の単位群の考え方を示しておく。横穴群—小支群—単位群—小単位群に分類しうる。支群は横穴群が分布する同一の谷地形の中に小さな谷、あるいはやや離れた地点にまとまりをもつ単位群の集まりであり、単位群は支群のなかでもさらに小単位群のまとまり(密集度)もつものを指し、小単位群は同一の墓前域をもつものをいう。ただし、この横穴群分類については大・中規模横穴群レベルに適応しうるもので、周辺に横穴群をもたない小規模横穴群のほとんどは横穴群=支群=単位群=小単位群になる可能性が高い。

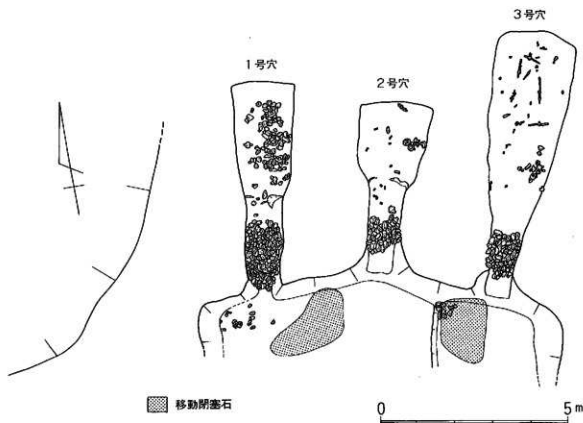
墓前域は長さ5m、幅3mの長方形に切り出されたもので、2号横穴と3号横穴の間には、段がある。おそらく2・3号横穴の位置関係と平面規模からみて(須恵器では同時期の築造)3号横穴のほうが当初築造され、のちに2号横穴の墓前域を築造する際に、すでにある3号横穴の墓前域がある程度埋まっていたため、2号横穴の墓前域をやや浅く掘削して拡張した結果つた段と思われる。同様の特徴は本書掲載の宇刈横穴N群の墓前域でもみられた。なお1号横穴の墓前域から第6図7～9の土師器の脚付長頸壺が出土している。完形率の高いものを含むなど横穴内からの掘きだしとも思えず、土師器であることも示唆的で墓前祭祀に伴う器とも考えられる。1号横穴と2号横穴の間の墓前域に、残存状況から見て2号横穴の移動閉塞石のまとまり、3号横穴の墓前域にも移動閉塞石のまとまりがある。後述する通り中世段階に移動され放置されたものと考えられる。

1号横穴 平面形態は玄室と羨道部に形骸的な袖部をもつがあまりはっきりとした境とはならず、玄室形態も奥壁が羨門部付近より少し広く長台形になるものである。しかし、玄室と羨道部の違いがまったくない筒型構造(筒型構造の横穴を以後D類とする)にはなっていない。金山横穴分類C類に該当する。断面形態は落盤のためはっきりしないが、緩やかな尖頭形アーチ型である。玄室内には木棺の敷石が存在し、拳大の人形礫を使用したもので金山分類B類に該当する。敷石の分布範囲からみて、木棺の推定位置は横穴の主軸方向に対して平行に安置する縦置型、金山分類B類に該当する。閉塞石はかなり現存しており上面に小振りの石、下面にはやや大振りの石を設置している。下面の石は横穴の主軸方向と平行するように小口部分が入り口から見えるように積んでいる。墓前域と羨道の段差はない。副葬品の出土状態は第6図1～9に示したものを以外整理できず、出土実測図を検討する限り脚付の長頸壺(9か?)、捉瓶などが見当たらないし、出土位置のわかったものは4の長頸瓶のみであったためなんともいえないが、土器類のみの副葬であったことは確実であろう(金山分類C類)。また、瓶類などの液体の容器が木棺の脇に添えられた状況も一般的にみられるものである。

2号横穴 平面形態は玄室と羨道部に明瞭な袖部をもつものであり、玄室形態も台形ではなく明確な長方形をなすものである。金山横穴分類A類に該当する。断面形態は落盤のためはっきりしないが、緩やかな尖頭形アーチ型である。玄室内には敷石は存在しない(金山分類E類)が、土器の出土状態からみると木棺の推定位置は横穴の主軸方向に対して直行して安置する横置型、金山分類A類に該当する。閉塞石はあまり現存しておらず下面のはやや大振りの石が残存しているのみである。おそらく玄室内で宝篋印塔の肩輪部分(現物所在不明)が出土していることから閉塞石のほとんどが、中世段階ではづされてしまったものと推測される。おそらく最近戸塚和美氏により報告事例がなされた墳墓



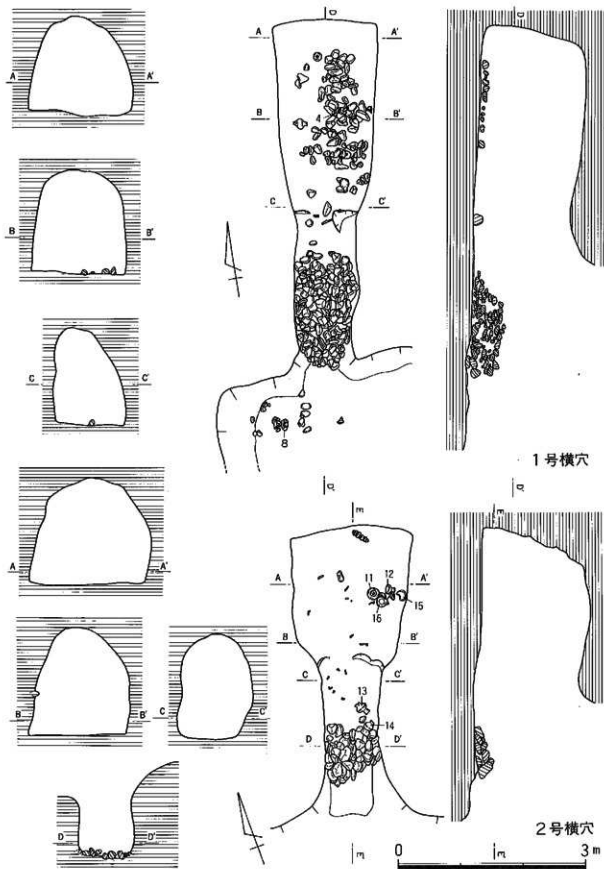
第2図 八幡山横穴群位置図



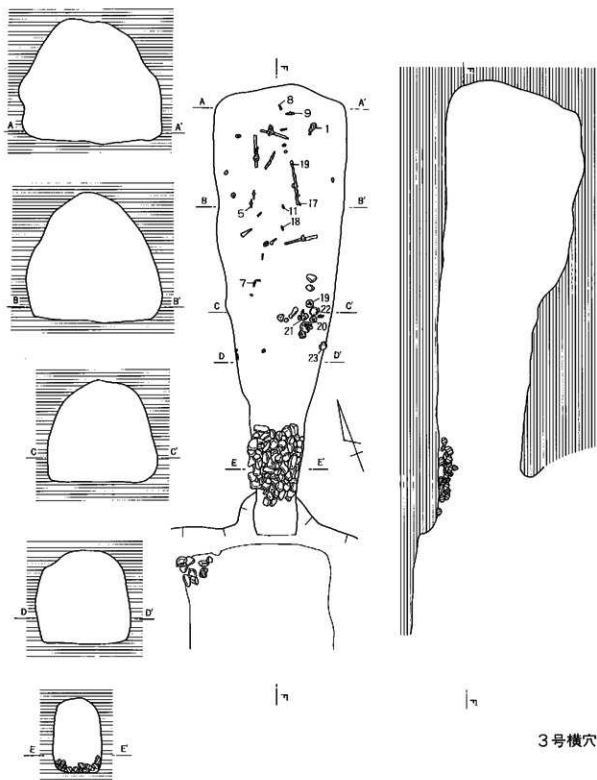
第3図 八幡山横穴群平面図

窟としての再利用の可能性が高いと思われる。(戸塚和美 1996) 残存している石からみると横穴の軸方向と平行するように小口部分が入り口から見えるように積んでいる。墓前域と羨道の段差は明瞭に存在する。副葬品の出土状態は第6・7図10～17に示したものの以外整理できていないが、比較的土器類は原位置が特定できた。木棺の近くには11・12の高環や16の上師器の大形環が位置し、反対に13・14の木棺の近くにあるべき脚付長頸瓶は羨道部の閉塞石近くから出土しておりあまり一般的でない配置を示す。実測図を検討すると全副葬品は把握できないが、土器類ばかりでなく鉄器や刀子等の鉄製品があったことは確実であろう(金山分類AないしB類)。中世以後の盗掘の所為であろう。とくに厨輪の出土した奥壁部分で出土物の出土が少ないことからみて、中世以降(14～15世紀?)の墳墓窟としての再利用と盗掘を受けたために木棺推定位置の副葬品の配列がはっきりしない。

3号横穴 平面形態は玄室と羨道部に明瞭な袖部をもたず、玄室形態も長台形を示す形態である。金山横穴分類C類に該当する。断面形態は落盤のためはっきりしないが、緩やかな尖頭形アーチ型である。玄室内には敷石は存在しない(金山分類E類)が、土器の出土状態からみると木棺の推定位置は横穴の軸方向に対して平行して安置する縦置型、金山分類B類に該当する。閉塞石はあまり現存しておらず下面のはやや大振りの石が残存しているのみである。おそらく、玄室内での副葬品の配列に若干の乱れがあるため、盗掘ではなく2号横穴同様に中世段階の墳墓窟として再利用されていたために閉塞石のほとんどが中世段階ではぶさされてしまったものと推測される。残存している石からみると小振りの石が多く規則的な石積みは観察されない。墓前域と羨道の段差は明瞭に存在する。副葬品の



第4图 1号・2号横穴实测图



3号横穴

第5図 3号横穴実測図

出土状態は第7図10～17に示したものの以外整理できていないが、比較的上器類については原位置が特定できた。木棺の近くには19・20の長脚高坏や21の脚付埴以外にも、23・24の液体容器と思われる平瓶なども出土しているため一般的な配置を示す。実測図を検討すると全副葬品は把握できないが土器類ばかりでなく特筆される副葬品として頭椎大刀のほか、素環轡の馬具、鉄鍬や刀子等の豊富な鉄製品がみられる。(金山分類A類)。

ii) 遺物

八幡山横穴からは、須恵器や土師器などの上器類のほか、裝飾大刀や馬具など豊富な鉄製品が出土している。以下種類別に説明を加えたい。

須恵器・土師器

須恵器 坏身・蓋については最大径が12cm内外になる17・18の坏身、最大径が10cm内外になる1・10・24～34がある。前者をA類、後者をB類としておきたい。A類坏身の17・18口縁部の立ち上がりは比較的高く、底部のヘラ削りの範囲は何れも狭く螺旋状2回転である。B類の1は口縁の立ち上がりは低くなっているが、最大径10cm以上あり底部ヘラ削りの範囲も同心円状2回転であるが、範囲は広く古い要素を残すのに対し、10・24～34は最大径も10cmを切り、底部・天井部ヘラ削り調整のないものも24～34に多く見られ新しい要素が見られる。坏身・蓋はA類については遠江考古学研究会須恵器編年を一手手直した浜松市で示されている須恵器編年(浜松市教育委員会 1988、以下遠江須恵器編年と呼ぶ)でⅢ期後半(6世紀末)、B類についてはⅣ期前半(7世紀中頃)の製品と思われる。

高坏は何れも無蓋のもので、長脚2段透の19・20と、透がなくなり大きい坏部のつく2・11・12・39の2種類が見られた。前者をA類、後者をB類としておく。A類の高坏は20の脚が長く坏部の突線も明瞭な古い要素を残すものと、19のように脚部も短く小形化が進み坏部の突線も省略される新しい要素のものがある。A類はⅢ期後半、B類についてはⅣ期前半に該当するものと考えられる。

瓶類については13・14の脚付長頸瓶、4の長頸瓶、23・22の平瓶がある。脚付長頸瓶は何れも脚部が短脚化したもので肩が張った新しい要素をもちⅣ期前半に該当するものと思われる。丸底の長頸壺も肩の張った形態でやはりⅣ期前半の製品と思われる。平瓶は全体の形態は丸く仕上げられ、23のようにカキ目施されるものがありⅢ期後半に該当するものと考えられる。

その他、3・21の埴がある。3は底部が平らで口縁が短く立ち上がるもので、Ⅳ期前半に該当するものと考えられる。21は脚付で肩の張りは弱く口縁の立ち上がりもやや長く、全体の形態も丸味をおびており、口縁部も比較的高く中径に沈線が施されるなど古い要素が見られることから、Ⅲ期後半に該当する製品と思われる。

土師器 坏としては小形の口径10cm代の5・6と、大形の口径17cm代となる15・16がある。5・6については口径も小さく口縁の立ち上がりも広がらず、須恵器編年Ⅳ期前半に伴うものと考えられる。大形の坏の15・16内部に暗紋をもつ薄手の胎上の緻密な製品で、外面も丁寧なヘラミガキが施されている。とくに15は胎土も金雲母を多く含み在地産の土師器とは思えない。磐田市の事神A1号埴(磐田市教育委員会 1984)で類似のものが出土しているため、何れも遠江須恵器編年Ⅳ期後半の古い段階(7世紀後半)に伴うものと考えたい。

7～9の脚付長頸壺は何れも近似した形態と調整を成すものである。壺部と脚部に接合痕が顕著に認められるが、何れも須恵器の長脚長頸瓶の模倣品と思われ、脚部が比較的高いことから遠江須恵器編年Ⅲ期後半段階に伴うものと思われる。

鉄器・耳環・玉類

馬具 1の素環の鏡板付轡が出土している。鏡板には作付の立間が存在せず、鉄製の兵庫鎖のついていた痕跡もなく、有機質の連結式立間、あるいは立間を持たない形式になると思われる。類例は少ないが江田船山古墳に存在する（岡安光彦 1984）。引手はく字引手の形態で銜先環はなく銜に直接接続している。特殊な形式の素環轡であるが素環の鏡板も人形であり、伴出須恵器のうち遠江須恵器編年Ⅲ期後半（6世紀末）の時期に該当するものと思われる。

頭椎大刀 19は柄頭の部分はないが頭椎大刀特有の部品である19-⑥の切羽と19-⑤の切羽縁金具が存在するため、頭椎大刀と判断した。柄間は19-⑧に示したとおり菱形あるいは花形になると思われる透のはいった板金がつき、幅広の鐔縁金具？（あるいは板金具の一部か？）にソケット状に入れ込んでいる。鐔は有孔のものが出土したらしいが、現物は確認できなかった。鞘金具は、鞘口金具・足金具・責金具・鞘尻金具が確認できた。鞘口金具は19-⑧に示した通り長さのあまり長くないものである。足金具は1ノ足、2ノ足とも現存している。刀身の銅錆痕跡から19-③・④のいずれかの足金具がついていたものと考えられる。責金具も1ノ責、2ノ責両方存在するが、19-②と③の断面形態は異なるため、どちらかが鐔縁金具の一部になる可能性もある。責金具も刀身についた銅錆痕跡から19に示した位置につくものと考えた。鞘尻金具は長めの丸尻の鞘金具となる。鞘尻金具の内部には針葉樹の木質が残っており、19-⑦に示した通り木質の上に黒漆を塗り、その上に布を巻き鞘尻金具を差し込んだものと考えられる。鞘本体は2枚の板を合わせており、木製の紙で留められていた。足間・鞘間飾板は認められないので、足間・鞘間ともに黒漆で飾られた鞘であったと思われる。刀身は完存していないが長さ90cm以上、幅3cmを測る後期古墳から出土する直刀としては大振りのものであり、両関造りであろう。接合しなかったが形態からみると17が柄の部分になる可能性が高い。該当時期については柄頭の部分が存在していないこと、板金の透をもつ形式の類例を確認できなかったので明確な時期を示せないが、柄間の部分が金・銀線巻きでなく板金になっていること、鞘尻金具が長めの丸尻の鞘尻金具であることなどから、頭椎大刀としては最古形式になるとは思えない。桜井達彦・新納泉氏らの頭椎大刀編年（桜井達彦 1986、新納泉 1984）を参考にすると6世紀末～7世紀前半に該当するものと考えたい。

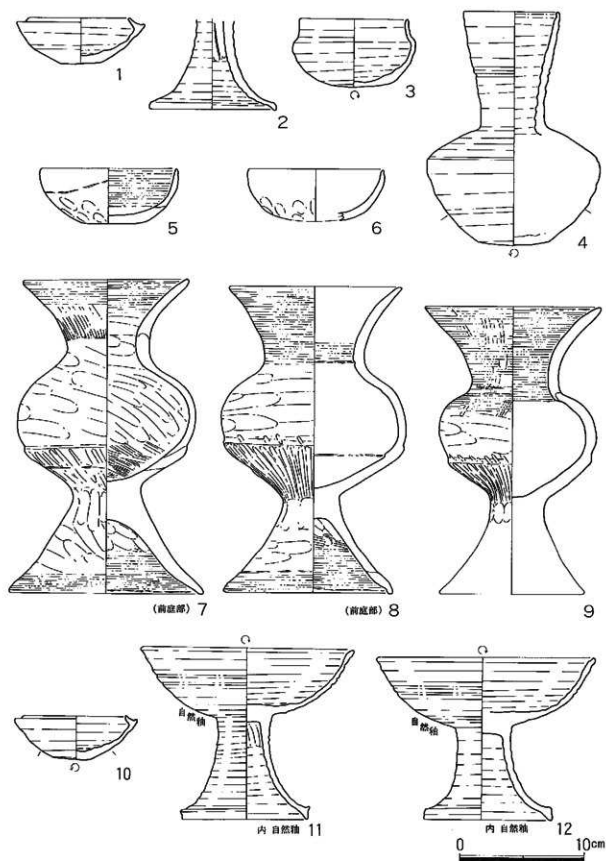
鉄刀金具 13・14・16は鉄刀の金具になると思われる。13は無窓の鐔、14は幅の狭い無窓の鐔、16は鞘口金具になるものと思われ、現物は確認できなかったが、3号横穴からは飾り大刀1本、鉄製金具や鐔を伴う直刀2本の都合3本の大刀が副葬されていたことがわかる。発掘調査の記録からは直刀3本の出土を確認しうが、現在2本の確認ができない。

鉄鍔 平根式は確認されず尖根式のものしか見られない。3～6はすべて棘隠被をもつもので、2も棘隠被を持つ形式になると思われる。2・4・7は刃部形態が3角形をなし逆刺をもたない。7は長めの刃部で片丸造りで、不自然に曲がっている。盗掘や後世の攪乱で曲がったとは思えず、横穴の葬送儀礼に伴って曲げられたものと考えたい。6は尖頭形の刃部をなすものである。

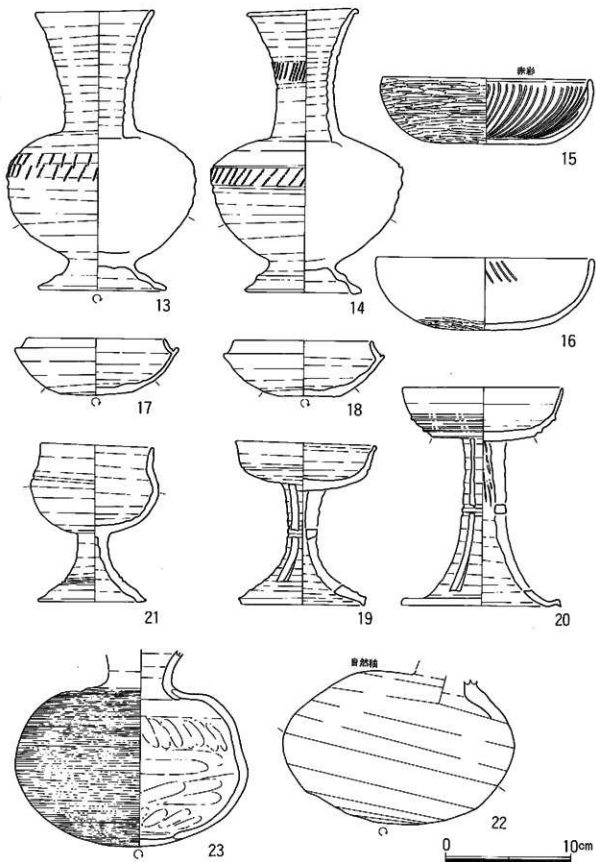
刀子 刀子は普通サイズの8～11と小形の12が出土している。8・9・12は両関、9は無関である。いずれもあまり使い込まれていない。

耳環 保存状態の良い銀装の耳環3個が出土している。いずれも後期古墳から普遍的に出土するサイズのものである。金装の耳環が出土していると伝えられているが、銀装の耳環の間違いだろう。

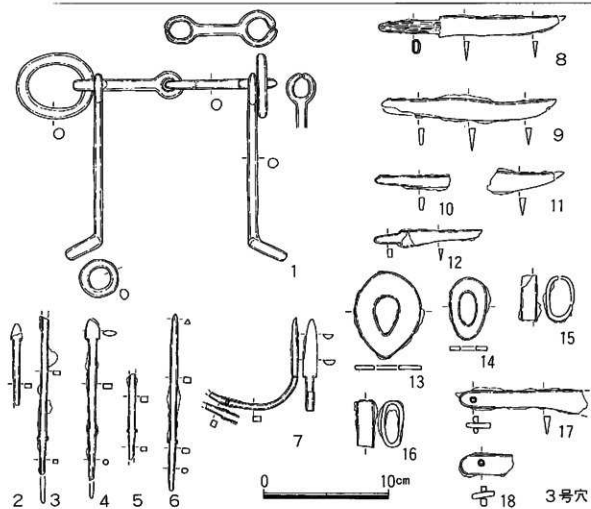
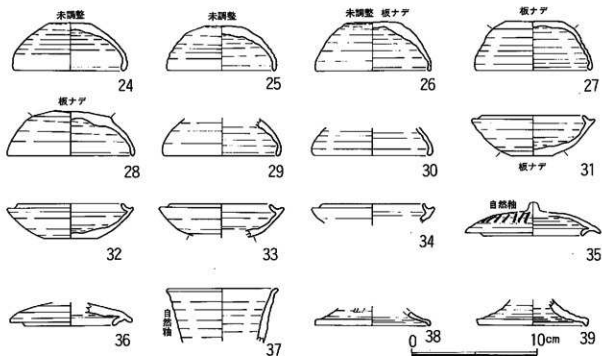
管玉 長さ2cm程度の小形の管玉である。表面が風化しているが、グリーンタフ製である。両面、片面穿孔の両方が確認できた。ただし、管玉については八幡山3号横穴出土品の中に整理されていたものであるが、発掘調査記録には出てこないためにはたして本当に副葬されていたものか心もとない。



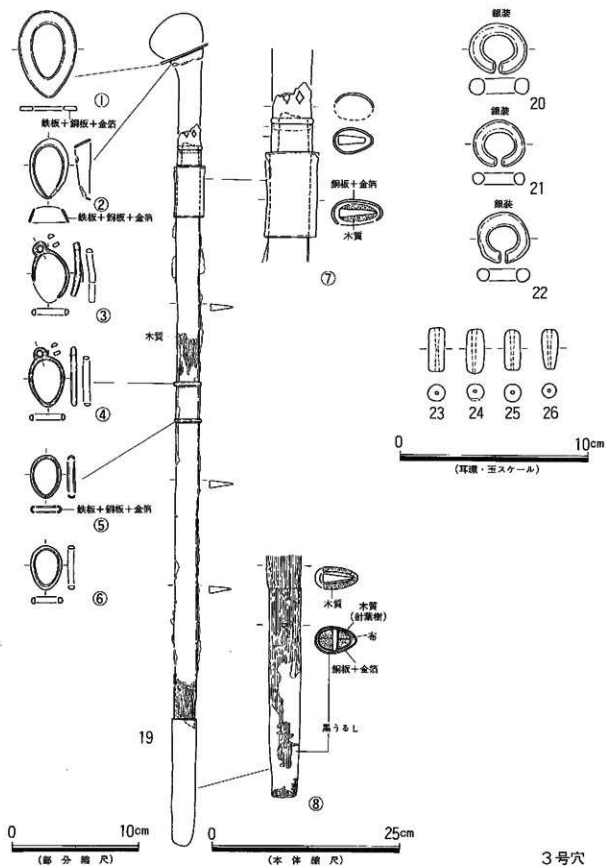
第6图 土器実測図1



第7圖 土器実測圖2



第8図 土器実測図3・鉄製品実測図1



第9図 鉄製品実測図2

3号穴

iii) 小 結

八幡山横穴群は3基の共有する墓前域から構成される横穴群で、おそらくズン坂横穴群の1小単位群(一肢群)に含まれるものと推定された。築造時期は山土須恵器と横穴の位置関係、平面規模から、古いほうから3号横穴→2号横穴→1号横穴の順に築造されと思われる。3号横穴と2号横穴は須恵器の年代からみるとほぼ同時期の6世紀末段階に築造されたもの、1号横穴は7世紀中頃に築造されたものと考えられる。追葬は土器からみると2号横穴で7世紀前半に1回、3号横穴で7世紀後半に1回確認されるが、1号横穴は土器でみる限り追葬の痕跡は確認されなかった。

平面形態は何れも袖を明確に造り出さない退化した型式(C類)のものであった。玄室を正方形に近く造り出し横置型の木棺位置を意識した1号横穴が古い要素をもち、縦置型の木棺位置になった1号・3号横穴は新しい要素をもった平面形態であるとも考えらるが、築造順位と照らしあわせるとやや矛盾する結果となってしまった。平面形態からは何れもC類であるため6世紀末の段階は横置・縦置の木棺位置の混在する時期で、7世紀代に縦置型の木棺位置に集約されると理解したい。すなわちその原因は追葬回数減少による横穴の小形化に絡んだ現象と考えられ、横置型木棺位置を持つ2号横穴は3号横穴よりも小形であり、古い要素の横置木棺位置を保ちつつ小形化の進んだ横穴と位置づけておきたい。

立面形態は何れの横穴もあまり明瞭な尖頭形とはならず、各時期を通じて明瞭な尖頭形を呈する太田川水系の字刈横穴群や道ヶ谷横穴群の系統というよりも、むしろ地蔵ヶ谷横穴群や金山横穴群のような原野谷川中流域南岸の横穴群の影響を受けているのではないかと考えられる。八幡山横穴群の築造場所は近世東海道から見える位置にあることは示唆的で、東海道から見えない道ヶ谷横穴群とは大きな隔絶があるのかも知れない。この点についてはズン坂横穴群の詳細な検討を行っていないため不確定要素を多分に残すが、重要な問題点と思われ第8章においてさらに考察を深めたい。

敷石は1世の墳墓として利用されていたため築造の古い2号・3号横穴に敷石があったかどうかかわからないが、現資料を見る限り2号・3号横穴に敷石のあった痕跡はない。敷石の意識の薄い小単位群であったのであろうか。

出土した副葬品については、3号横穴が通例見られる土器のほか馬具や頭椎大刀など特筆される副葬品が見られ、袋井市域で発掘調査された横穴のなかでは圧倒的に豊富な内容を示す。ズン坂横穴群との関係が明らかでないが、袋井市域の横穴群のなかではどのような位置づけが可能となるか、この点についても第8章にて地域色の問題ともからめて考察を進めたい。

第4章 道ヶ谷横穴B群・北の谷横穴出土遺物

i) はじめに

道ヶ谷横穴B群の発掘調査は、昭和46年10月13日～11月8日まで実施された。また横穴群の地番は久能張ヶ谷2829-1番地他である。当時の記録によると、宅地造成（大黒産業株式会社関連）により消滅するため緊急発掘調査の必要が生じた。発掘調査の担当者は平野和男氏に依頼し、さらに担当者とともに調査員として足立順司氏（現静岡県埋蔵文化財調査研究所）が主に現地で調査に当たった。発掘調査の事務については袋井市教育委員会が行った。さらに、昭和40年代に土取りによって消滅したらしい北の谷横穴の資料も袋井市教育委員会にて保管されていたので、あわせて本章で報告する。

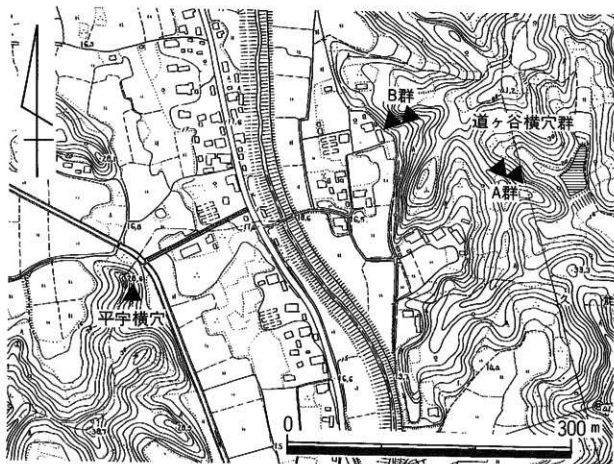
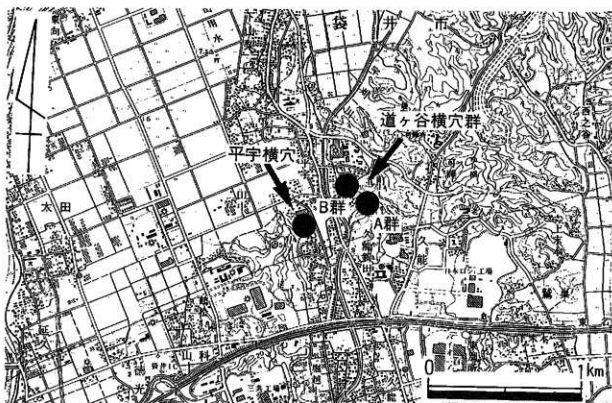
ii) 横穴の形態・遺物出土状況

単位群・墓前域 道ヶ谷横穴B群は方形に斜面を切り出した3基の墓前域をそれぞれ共有する合計5基の横穴からなることから、3小単位より構成される横穴群であることが判明した。すなわち、1～3号横穴＝第1小単位群、4号横穴＝第2小単位群、5号横穴＝第3小単位群である。また、第10図で示した通り、周辺部には5基から構成される小規模横穴群の道ヶ谷横穴A群がある程度のため、道ヶ谷B横穴群は小規模横穴群であり、第2章1)で示した古墳群の単位群である横穴群－支群－単位群－小単位群の分類から検討すると、道ヶ谷横穴B群＝3小単位＝1単位群＝1支群となり、同規模の道ヶ谷横穴A群とともに2支群からなる小規模横穴群を形成すると思われる。

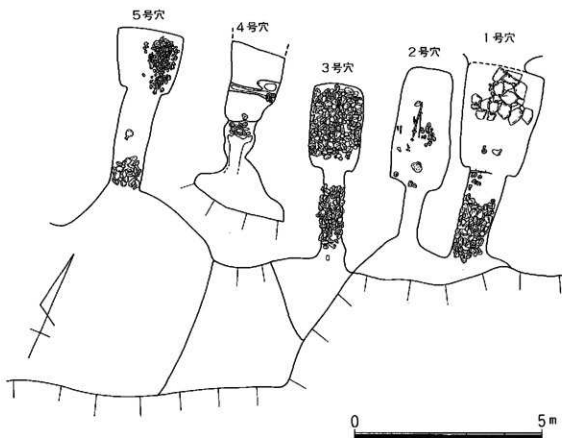
土砂崩れのためはっきりしないが、1～3号横穴についての墓前域は長さ5m程度の規模で長方形に切り出されたものと思われる。4号横穴、5号横穴は単独の墓前域をもっている。4号横穴は他の横穴よりも1段高いレベルに存在する。

1号横穴 平面形態は玄室と羨道部に明確な袖部をもち、玄室形態も奥壁が羨門部付近より少し広く長台形になるものである。金山横穴分類A類に該当する。断面形態は土取りのため天井部が大きく欠損しているためはっきりしないが、尖頭形アーチ型になると思われる。玄室内には木棺の敷石が存在し、扁平な人形礎を使用したもので金山分類にはないためこれをF類とする。敷石の分布範囲からみて、木棺の推定位置は横穴の主軸方向に対して直行に安置する横置型、金山分類B類に該当する。閉塞石はかなり現存しており上面に小振りの石、下面にはやや大振りの石を設置している。下面の石は横穴の主軸方向と平行するように小口部分が入り口から見えるように積んでいる。墓前域と羨道との段差は少しある。副葬品の出土状態は第15図15・14に示したものの以外整理できず、出土実測図を検討する限り脚付の長頸壺（フラスコ瓶か？）が見当たらないし、1～13の环蓋・身の出土原位置については羨道ないし羨門付近としかいえない。また、敷石付近から玉類・直刀の出土が見られたらしいが場所の特定はできなかった。副葬品の組み合わせからみると鉄刀・玉類・土器からなり、金山分類A類に該当する。

2号横穴 平面形態は玄室と羨道部に明確な袖部をもつ形態であり、玄室形態も台形ではなく明確な長方形をなすものである。金山横穴分類A類に該当する。断面形態は落盤のためはっきりしないが、尖頭形アーチ型を呈すると思われる。玄室内には敷石は存在しない（金山分類E類）が、棺廬石と思われる礫がまとまって川土している。直刀の出土状態、横穴の平面形態からみると木棺の推定位置は横穴の主軸方向に対して平行して安置する縦置型、金山分類A類に該当する。平面図に図示されていないが断面図からみると玄室中央に排水溝があった可能性が指摘しうる。閉塞石はまったくみられないことから、閉塞施設が礎使用のものかどうか検討を要するであろう。墓前域と羨道の段差は明瞭で



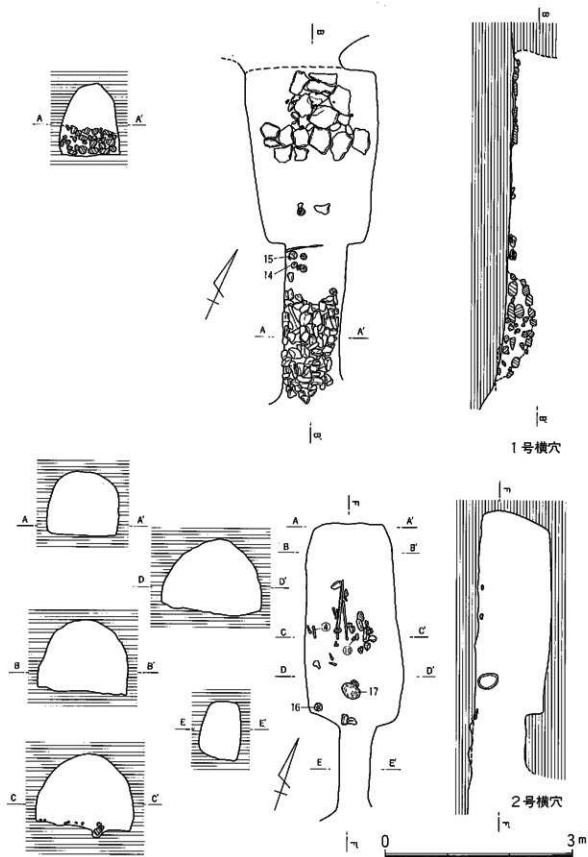
第10図 道ヶ谷横穴B群位置図



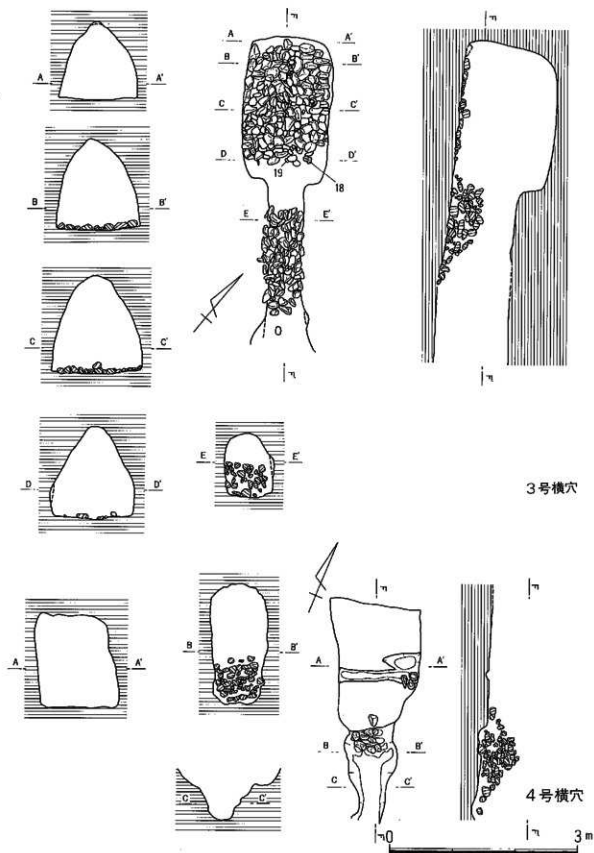
第11図 道ヶ谷横穴B群平面図

はない。副葬品の出土状態は第15図16・17に示したものの以外整理できていないが、土器類はこの2点に特定できそうである。水容器である17の横瓶は玄門近くに据え置かれ、しかも木棺付近になると思われ比較的一般的な配置を示す。実測図を検討すると全副葬品は把握できないが、土器類ばかりでなく鉄鍔や刀子のほか、直刀2本の鉄製品が副葬があったことは確かであろう（金山分類A類）。直刀は鉄製の鐔を持つものや鉄製の鞘金具等をもつものがあり、本横穴群の中では群を抜く豊富な副葬品の内容を示している。

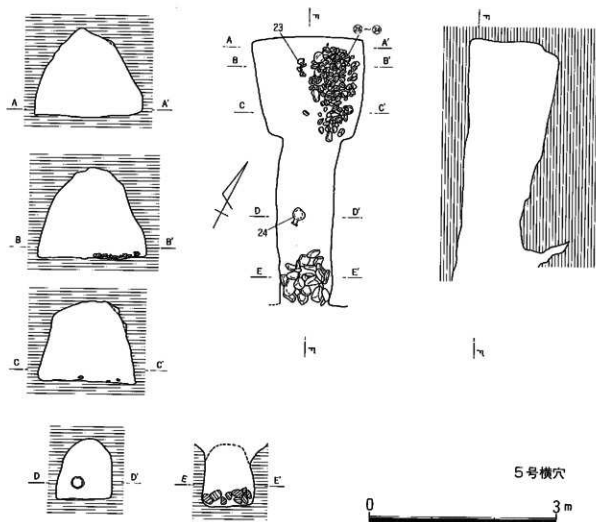
3号横穴 平面形態は玄室と羨道部に明瞭な袖部をもち、玄室形態も長方形を示す形態である。金山横穴分類A類に該当する。断面形態は、鋭く造り出された尖頭形アーチ型で本来の断面形態を残している。玄室内には準人の跡が一面敷かれた敷石が存在する（金山分類A類）ため、木棺の位置を敷石から特定できないが横穴の平面形態からみると、横穴の主軸方向に対して平行して安置する縦置型、金山分類B類に該当する。閉塞石は良く残っており上面は準人以下の小振りの石、下面はやや大振りの石が石室の主軸方向に積まれている。墓前域と羨道の段差は明瞭ではない。副葬品の出土状態は第15図18・19に示したものの以外整理できていないが、比較的上器類は少ない横穴とみてよい。ただし、木棺の近くに副葬されたと思われる瓶類1点が確認できなかった。実測図を検討すると全副葬品は把握できていないが土器類ばかりでなく、鉄製の直刀の鐔や鉄鍔、刀子などが副葬されていたらしい（金山分類A類）。19の灰釉陶器は玄門付近から出土していることから、灰釉陶器の年代である10世紀前半に横穴内の何らかの再利用があり、目立つ直刀などはこの時持ち出された可能性もあろう。



第12图 B 1号・B 2号横穴案测图



第13图 B 3号・B 4号横穴实测图



第13図 B 5号横穴実測図

4号横穴 奥壁・玄室の半方を大きく欠損しているため全体の平面形態は明らかではないが、玄室と羨道部に明瞭な袖部はもたない形態になり、金山横穴分類C類に該当すると思われる。断面形態は、落盤のためはっきりしないが、尖頭形アーチ型になると思われる。玄室内に敷石があったかどうかについては玄室の大半が破壊されているためわからないが、残存している平面形態がC類になりそうなことからみて、木棺の位置を横穴の主軸方向に対して平行して安置する縦置型、金山分類B類になると推定しておきたい。閉塞石は良く残っていたが、上面の閉塞石の実測図が見つけれなかったので具体的な積み方についてはわからない。玄門部付近に横穴主軸に対して直行する小溝が発見されているが、閉塞板などを立て掛ける閉塞施設に関する遺構かどうかは明らかでない。墓前域と羨道の段差は明瞭ではない。副葬品の出土状態は玄室部分が失われているためまったくわからない。

5号横穴 平面形態は玄室と羨道部に明瞭な袖部をもち、玄室形態は奥壁がやや幅広の正方形に近い台形を示す形態である。金山横穴分類A類に該当する。断面形態は、鋭く造り出された尖頭形アーチ型で本来の断面形態をよく残している。玄室内には拳人以下の小礫が東平面に敷かれた敷石が存在する(金山分類A類)ため、木棺の位置は横穴の主軸方向に対して平行して安置する縦置型、金山分類

B類に該当する。閉塞石は下面の石しか残っていないが、やや大振りの石が石室の主軸方向に積まれていたことがわかる。墓前域と義道の段差は明瞭ではない。副葬品の出土状態は第16号20～25に示したものの以外整理できていないが、比較的上器類は種類の多い横穴とみてよい。ただし、木棺の近くに副葬されたと思われる長頸瓶（フラスコ瓶？）1点が確認できなかった。実測図を検討すると全副葬品は把握できていないが、土器類ばかりでなく、敷石上から玉類や金環等の装身具が副葬されていたが鉄製品については副葬されていなかったと思われる、金山分類C類に該当する。

iii) 遺物

道々谷横穴B群からは、須恵器や土師器などの土器類のほか、大刀や鉄鏃の鉄製品、玉類など比較的どの横穴群にも典型的に見られる副葬品が出土している。以下種別別に説明を加えたい。

須恵器・土師器

須恵器 坏身・蓋については最大径が11cm代になる1～7・20の坏蓋、8～12の坏身、最大径が10cm内外になる21・22の坏蓋、底部は丸く口径10cm内外になる坏身・坏蓋の逆転した坏身の13がある。11cm代のものをA類、10cm内外のものをB類、口径10cm前後になる坏身・坏蓋逆転のものをC類と分類しておきたい。A類坏身の8～10は比較的外反した口縁部であるのに対して、11・12の坏身の口縁は内傾傾向がある。へう削りの範囲は坏蓋の2を除いて何れの坏身・坏蓋も狭く同心円状に2回転施されている。B類の坏蓋については形態化した沈線もなくへう削りも同心円状に2回転で範囲も狭い新しい要素をもつものである。C類については底部は丸く仕上げられ、口縁部の沈線は消失しており、体部は比較的深めに作られている。坏身・蓋はA類については、八幡山横穴群と同じく遠江須恵器編年で示すならばⅢ期末（7世紀初頭）、B類についてはⅣ期前半（7世紀中頃）、C類についてはⅣ期後半の古い段階（7世紀後半）に該当すると思われる。

高坏は何れも無蓋のもので、長脚2段透の16の1種類が見られた。16は長脚2段透高坏の中でも、脚部も短く小形が進み坏部の突線も省略される新しい要素がみられるものである。Ⅲ期後半に属するものであろう。

瓶類については17の横瓶、15・16の平瓶、24のフラスコ瓶がある。横瓶はやや乱れたカキメ調整が縦位に施され、口縁も丸みを帯びたやや古くなる要素をもつもので、Ⅲ期後半に該当する製品と思われる。平瓶は全体の形態をみるといずれも肩の張る新しい要素をもつもので、Ⅳ期前半に該当する製品と考えられる。24のフラスコ瓶も大形のものでやや扁平な形態であるが、概して新しい傾向をもちⅣ期前半に該当すると思われる。

その他、14・23の甕がある。14は注口部が突出し新しい要素も見られるが、底部は丸くてへう削りの範囲も広く、口縁も大きく内彎する比較的古い特徴をを残しているためⅢ期末に該当する製品と考えられる。23は底部もやや平たくなりへう削りの範囲も狭くなり、口縁の立ち上がりも短く退化してきており、体部の文様である沈線も省略傾向のある新しい要素がみられることから、Ⅳ期前半に該当すると思われる。

土師器 脚付盤とでもいえるような大形の皿状の坏部をもつ高坏の25が出土している。全体に赤彩色されており、内面に暗紋、外面には一部ハケ目を残すがミガキ調整が急急に施されている。胎土も金雲母を多く含み在地産の土師器とは思えない。磐田市市神A1号墳（磐田市教育委員会 1984）で類似のものが出土しているので遠江須恵器編年Ⅳ期後半に伴うものと考えたい。

灰釉陶器 19の灰釉陶器碗は、口縁部は小さく外につまみ出され、高台も退化した三日月高台の形状で、底部にもへう削り調整が施されている。松井一明編年Ⅲ期一（10世紀前半）に該当する静岡県

内産灰釉陶器と思われる(松井一明 1989)。

鉄器・耳環・玉類

直刀・刀装金具 直刀と思われる破片として1・2・23があげられる。また、10・11・19・22は直刀の刀装金具と思われる鉄製品である。19は卵倒形にならない無窓の鐔、22は鞘口金具、11は短く尻部が平気味になる鞘尻金具、10は鞘の責金具になると思われる。現物は確認できなかったが、実測図より2号横穴からは鐔を伴う直刀1本と鐔のない直刀1本の都合2本の直刀が副葬されていたことがわかる。そして、鐔付の直刀には鉄製の鞘金具が伴っていたと考えられる。

鉄鏃 平根式は確認されず尖根式のものしか見られない。3・7・12・17・20・21のすべて鎌鏃被をもつ型式になると思われる。3・6・12の刃部形態は柳葉形ないし三角形をなし逆刺をもたず、いずれも片丸造りになるものである。頸部は細目のものが多く16・17などは実用品であるか疑わしい。

刀子 刀子は普通サイズの8・9・18が出土しており、8・9は両刃造りである。

耳環 保存状態の良い金装の耳環2個が出土している。いずれも後期古墳から普遍的に出上するサイズの製品である。

勾玉・丸玉 長さ3cm程度の普通サイズの勾玉である。何れも質のあまり良くない碧玉で、片面穿孔のものが多い。丸玉は31の硬玉製のもの、32・35は珪化木製のもので珍しい。

iv) 北の谷横穴出土遺物

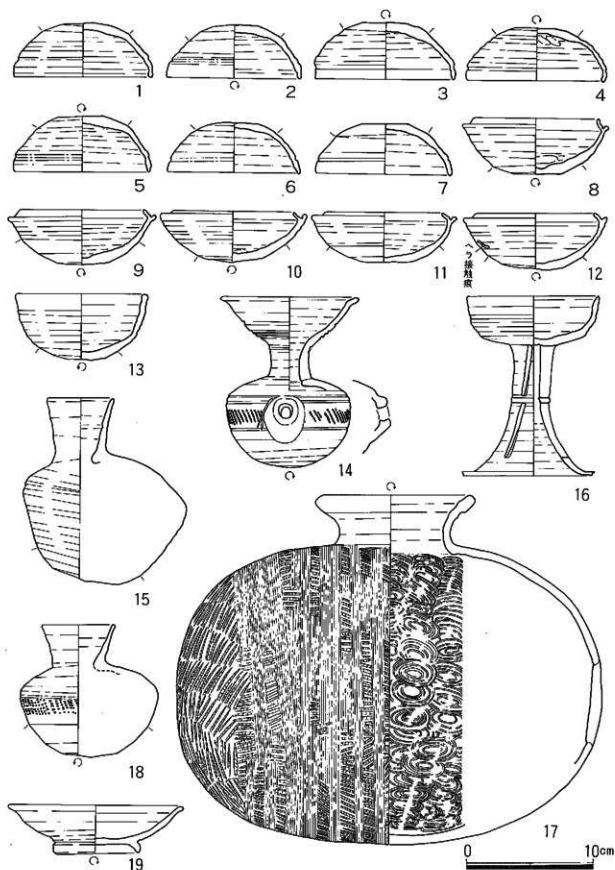
北の谷横穴からは、出土した遺物のうち現在確認できるのは須恵器16点と、若干の大形の甕ないし壺の破片のうえ出土状態も明らかではないため、資料紹介程度の説明しかできないが以下種類別に説明を加えたい。

須恵器

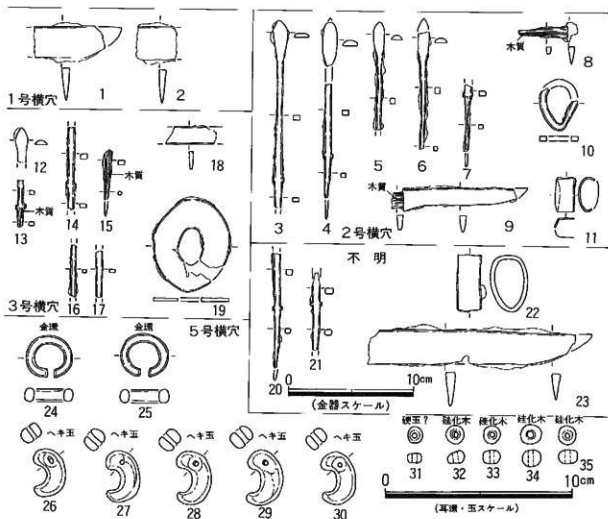
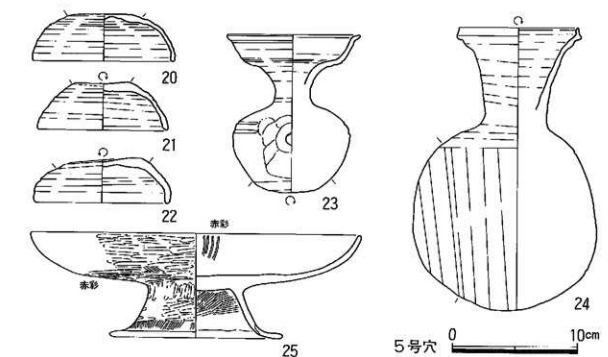
坏身・蓋については最大径が12cm内外になる1の坏蓋、4・13の坏身、最大径が11cm代になる1の坏蓋、3の坏身、底部は平たく口径9cm内外になる坏身・坏蓋の逆転した坏身の14がある。12cm前後のものをA類、11cm代になるものをB類、口径9cm前後になる坏身・坏蓋逆転のものをC類として分類しておきたい。A類坏身のうち6・8・9は比較的外反した口縁部をもち古い傾向を残すのに対して、5・7・9・13の坏身口縁は短く立ち上がり新しい傾向をもつ。ヘラ削りの範囲は坏身の4を除いて何れの坏身・坏蓋も狭く螺旋状に2～3回転施されている。B類の坏蓋については形骸化した沈線がみられ、ヘラ削りは同心円状に3回転施され範囲は比較的広く古い要素をもつに対して、坏身については口縁の立ち上がりも低く、底部ヘラ削りも同心円状に2回転の狭い範囲に施されており新しい要素をもつものである。C類については底部は平に仕上げられ、口縁部には形骸化した沈線が施され、体部は比較的深めに作られている。坏身・蓋はA類については遠江須恵器編年でⅢ期後半(6世紀末)、B類についてはⅢ期末(7世紀初頭)、C類についてはⅣ期後半の古い段階(7世紀後半)の製品と思われる。

瓶類については15の広口壺、16の長頸瓶がある。広口壺は体部にやや乱れたカキメ調整が施され、口縁も短く外反し丸みを帯びた特異な形態のもので、黒くすんだ色調をなしていることから、Ⅲ期後半に該当する東遠江産の製品と思われる。長頸瓶は肩の張りも強く、脚部も短く退化しており新しい要素がみられ、Ⅳ期前半に該当する製品と考えられる。なお、この長頸瓶の脚は短い直立した脚で四角い透が穿たれ、当地域では珍しい形態である。

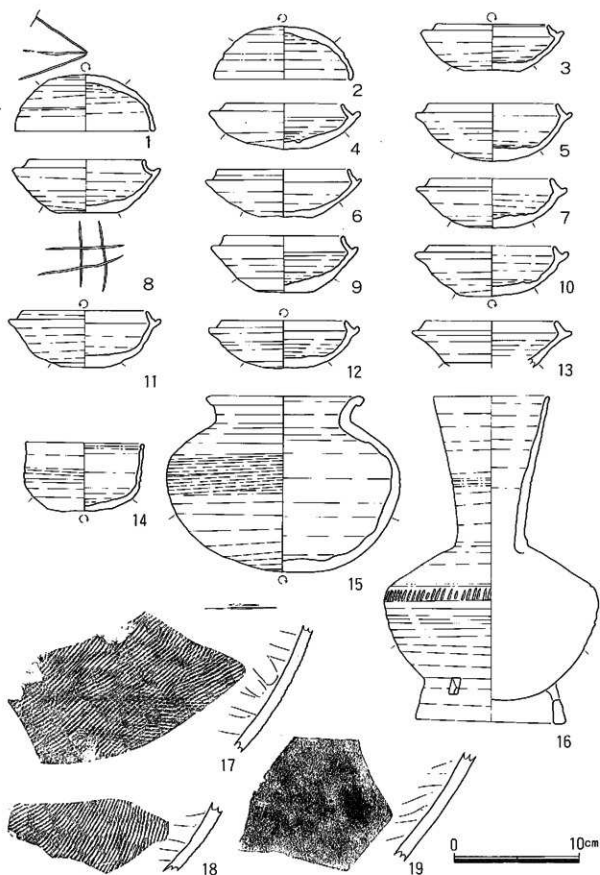
その他、17・19の人物像ないし甕の破片が出土している。内面整形はいずれもナデ整形で、青波文を残さないⅣ期以降の製品と思われる。



第15図 土器実測図 1



第16図 土器実測図2・鉄製品実測図



第17図 北の谷横穴出土土器実測図

v) 小 結

道ヶ谷横穴B群は共有する墓前域から3小単位、合計5基の横穴から構成される横穴群で、おそらく道ヶ谷横穴A群とともに2つの支群規模で、合計10基程度の小規模横穴群を形成するものと推定された。築造時期は出土須恵器と横穴の位置関係、平面規模から、B群中では2号横穴が最も古く、以後1号と5号横穴、さらに3号横穴と築造が続けられていったと思われる。すなわち、第1小単位群では2号横穴→1号横穴→3号横穴の順に築造され、1号横穴が築造された時期に第3小単位群の5号横穴とおそらく第2小単位群の4号横穴が築造されたと思われる。すなわち、2号横穴の築造時期は6世紀末、1号・4号・5号横穴は7世紀初頭、3号横穴については7世紀中頃に築造されたものと推定されるのである。また、追葬は土器からみると1号横穴で7世紀後半に1回、5号横穴で7世紀中頃に1回確認されるが、その他の横穴は土器で見ると追葬の痕跡は確認されなかった。

平面形態は4号横穴を除いて何れも袖を明確に造り出す古い要素を比較的残したA類が中心となる形態であった。また、玄室形態は長方形であるが横置型の木棺位置を意識した1号横穴が古い要素を残すものの、縦置型の木棺位置になった2号横穴が築造時期が一番古く、必ずしも横置型が小単位群のなかでは最古の築造横穴にはならない結果となっている。おそらく八幡山横穴群でも確認されたように6世紀末の段階は横置・縦置の木棺位置の混在する時期で、7世紀代になると縦置型の木棺位置に集約されると理解したい。すなわちその原因は追葬回数減少による横穴の小形化に絡んだ現象と考えられ、5号横穴の玄室の小形化に端的に現れていると考えたい。しかしながら、宇刈横穴群に見られる筒形構造(D類)の小形横穴は、道ヶ谷横穴B群には存在していない。

立面形態は落盤しているものもあるが、概して何れの横穴も鋭い造りの尖頭形になると思われ、前章でも触れた通り明瞭な尖頭形を呈する太田川水系の宇刈横穴群の系統に連なるもので、八幡山横穴群、地藏ヶ谷横穴群、金山横穴群のような原野谷川中流域南岸の横穴群とは一線を画する形態をなすものと理解したい。第2章でも触れた通り道ヶ谷横穴群の集落については、近世東海道から離れた太田川の自然堤防上に位置する特持Ⅰ・Ⅱ遺跡、鶴松遺跡が該当するのに対して、八幡山横穴群の集落は近世東海道に隣接した太田川の自然堤防上に位置する上橋遺跡、堀越遺跡などが考えられ、そこに横穴を築造した集団の違いが、横穴形態の微妙な地味色に現れるのではないかと推定される。

敷石は最古の築造の2号横穴がおそらく棺座石のタイプで、その他1・3・5号横穴に敷石が見られ、平面形態も古いA類となっていることと共に、敷石も比較的丁寧に敷かれていることから、敷石の意識の強い古い要素を残す小単位群であったと考えられる。

出土した副葬品については2号横穴が通例見られる上器類のほか、鉄製鎗金具もつ直刀2本、鉄鎌など支群中では比較的豊富な鉄製品が出土している。第1小単位群では3号横穴でも鋸が出土していることから7世紀代においても直刀の副葬がなされ、支群中ではこの築造が続く第1小単位群が全時期を通じて優位な立場を保っていると考えられる。単発の小単位群を形成する5号横穴と4号横穴については鉄製品の副葬もなく、築造も続かないことから第1小単位群からみると劣勢な立場に立たされていた集団の横穴と考えられる。この小単位ごとの優劣関係の分析については、八幡山3号横穴に見られた飾り大刀をもつ横穴の問題とからめて第8章でさらに考察を深めたい。

第5章 宇刈横穴N群

i) はじめに

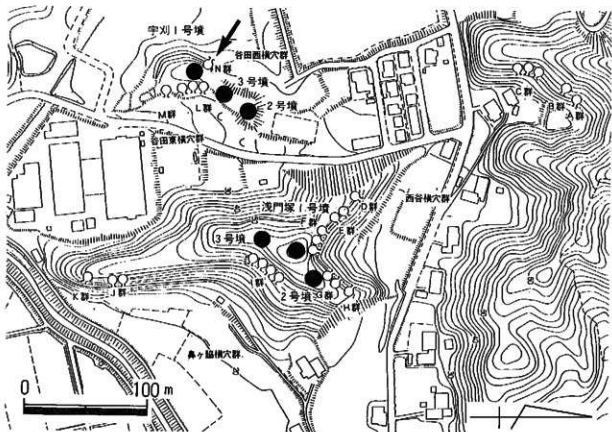
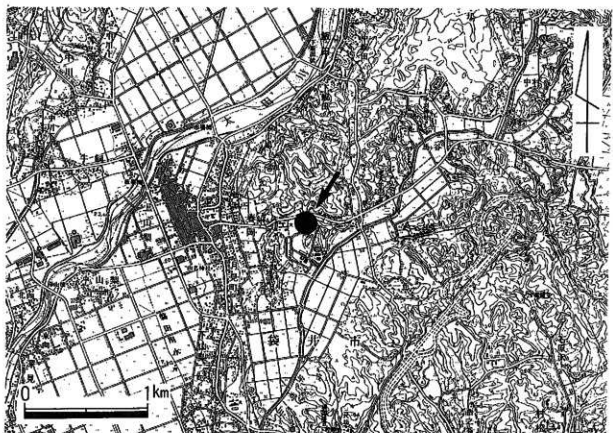
日研フード本社株式会社が研修棟建設計画をもったところ、建設予定地(宇刈・三沢)の隣接地に宇刈横穴N群が存在していた。横穴本体に影響がでないように建設地点を定めたものの、本工事に至った段階で横穴群の一部を掘削せざるを得ない状況となり、昭和60年2月13日頃に工事途中で教育委員会に横穴の破壊が進められている情報が伝えられた。教育委員会は急遽建設用地の確認に寺田義昭(当時教育委員会指導主事)を出向させたところ、横穴本体と墓前域が基礎工事のため一部破壊されている状況が確認されたので、日研フード本社株式会社工事担当者に発掘調査の必要性を説明し協力を依頼した。基礎工事中の出来事であったため、現地の担当者は言うに及ばず工事関係者も相当苦しい立場に立たされており、教育委員会としてもできるだけ迅速な対応を迫られ準備・調査期間ともにほとんどないという困難な日程を組まざるを得ない状況となった。このような経緯のもと、発掘調査は松井・明(当時教育委員会学芸員)を現地担当者として、昭和60年2月15日～2月17日の3日間という極めて短期間で実施され、完了することができた。短期間で調査が完了したことは、ひとえに現地担当者と工事関係者の迅速な協力がなされたためである。原因者のサイドについては建設工事にあたり、できるだけ早い段階で教育委員会との埋蔵文化財の取り扱いについての協議がなされなかったことが悔やまれるし、反対に教育委員会サイドとしては埋蔵文化財の周知徹底をどのようにしていくかという埋蔵文化財行政の基礎的な問題点も反省材料として残った調査となった。

宇刈横穴群は第18図に示したとおり、A～N群の支群、総数100基をこえる太田川水系では屈指の大規模横穴群である。N群は横穴群の西端に開析された谷の東側斜面に位置している。過去の記録によると100m北の東斜面にも1支群程度の規模の横穴群があったらしいが、宅地造成のためすでに消滅している。また、この谷の最奥部西側斜面にも奥谷田横穴群とよばれる支群単位の横穴群が存在していたらしいが、過去の上取りによってすでに消滅している。このような状況から見ると宇刈横穴N群は横穴群西端の谷に位置する単位群として唯一残されたものであったと思われる。

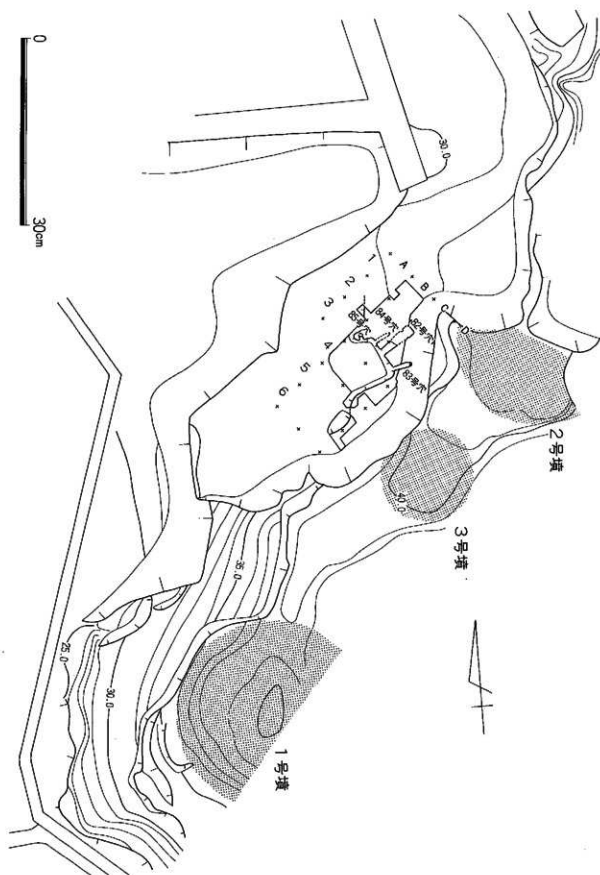
ii) 横穴の形態・遺物出土状況

単位群・墓前域 宇刈横穴N群は方形に斜面を切り出した1つの墓前域をそれぞれ共有する合計4基の横穴からなる横穴群である。また、前述したとおり宇刈横穴群は大規模横穴群であり、第2章1)で示した横穴群の単位群を示す横穴群・支群＝単位群＝小単位群の分類から検討すると、宇刈横穴N群は、谷田西・谷田奥支群のなかの1単位群＝1小単位群となる。ちなみに宇刈横穴群はこの谷田西・谷田奥支群のほか、谷田東支群、脇ヶ鼻支群、西谷支群の4支群(春岡横穴群を加えると4支群)で構成されていることがわかる。さらに、各支群内の単位群を示すならば谷田西・谷田奥支群＝N群、宅地造成破壊横穴群、奥谷田横穴群の3単位群、谷田東支群＝M・L群の1単位群、脇ヶ鼻小群＝I群、J・K群の2単位群、西谷支群＝A～C群、D～F群、G・H群の3単位群に分類される。小単位群＝A～Nの各群になるかは、墓前域の確定が発掘調査を経ていないため今回あえて示さないが、各群の中にも複数の墓前域が確認されるため小単位群＝A～N群とはならないことだけ指摘しておきたい。

墓前域については幅7m、長さ5m程度の炭様で明瞭に長方形に切り出されたもので、非常にはっきりしたプランをもつ墓前域である。墓前域中程に10cm程の段差が確認された。この段差は、八幡山横穴群でも確認されたように、おそらく当初82号横穴が掘削され、82号横穴の墓前域が少し埋まった



第18図 宇刈横穴群位置圖



第19图 宇刈横穴群周边地形图

段階で84号横穴の墓前域を西側に拡張したため生じた段差と考えたい。とすると、段差のない83号横穴はあまり埋まっていなかった段階に墓前域が拡張されたか、82号横穴の墓前域掘削時に83号横穴の築造の墓前域を事前に掘削していたかのどちらかであろう。第20図に示した墓前域の土層堆積を見ると、明瞭な切り合い関係はないので、墓前域拡張の際には従来存在した墓前域の部分についても改修しているものと考えられる。

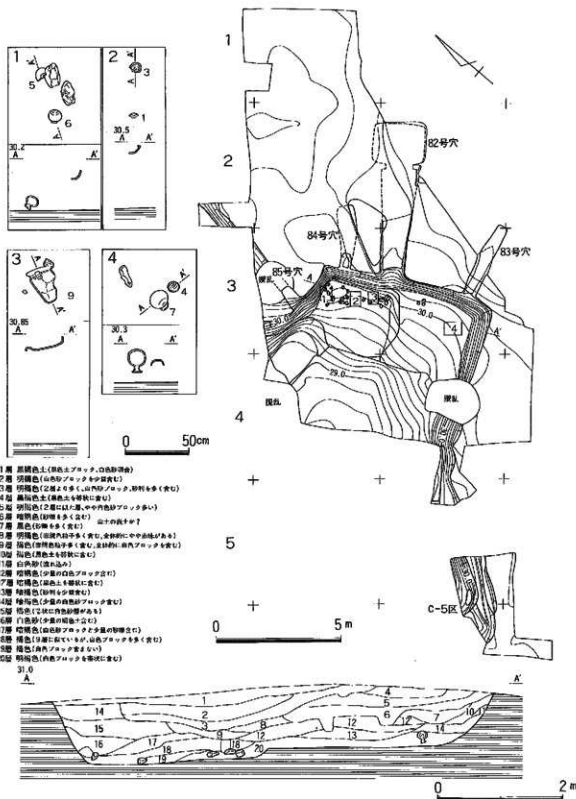
今回出土した遺物のほとんどは墓前域から出土したものである。第20図に示したとおり、底から相当浮いている5・3・9などは墓前域がある程度埋まった段階で横穴内部ないし、横穴入口付近から転落してきたものと思われる。底面付近で出土した4・6・7なども転落したような状況で出土していることから、横穴内部あるいは横穴入口から転落したもの、とくに出土位置からみて3・5・6・9は83号横穴、4・7は82号横穴から転落したものと推定される。墓前域からの山土土器に関しては3・5のような破片のものもあるが、4・6・7・9など完形率の高いものが含まれ、横穴内部からの人為的な投機とも思えない状況が確認された。その原因については横穴の平面形態も絡んでいる事柄と考えられ、小結の項で考え方を示したい。

82号横穴 本横穴は羨道部、玄室共に過去の土取り工事や今回の工事のために大部分を失ってはいるが、幸いにも残存部分からある程度平面形態が判明した。第21図に示したとおり玄室と羨道部に突出するような明確な袖部をもち、玄室形態もほぼ正方形に近い横長の長方形の平面形態をなすものと考えられ、金山横穴分類A類に該当するが袖部の突出は特異な形態である。断面形態は土取りのため天井部が大きく欠損しているためはっきりしないが、尖頭形アーチ型になると思われる。玄室内の床面も半分以上攪乱されており敷石が存在したかどうかは不明であるが、棺台となる削り出しはなかった。木棺の位置については玄室の横長の長方形の形態となることからみて、木棺の推定位置は横穴の主軸方向に対して直行に安置する横置型、金山分類B類に該当すると思われる。閉塞石は痕跡も含めてまったく存在していなかった。2の環蓋が比較的原位置保っているとなると、石による閉塞施設ではなくて、突出する袖部外側に木蓋のような閉塞施設を想定したいが推測の枠を出ない。墓前域と羨道との段差は80cm以上を測り相当にあることがわかる。

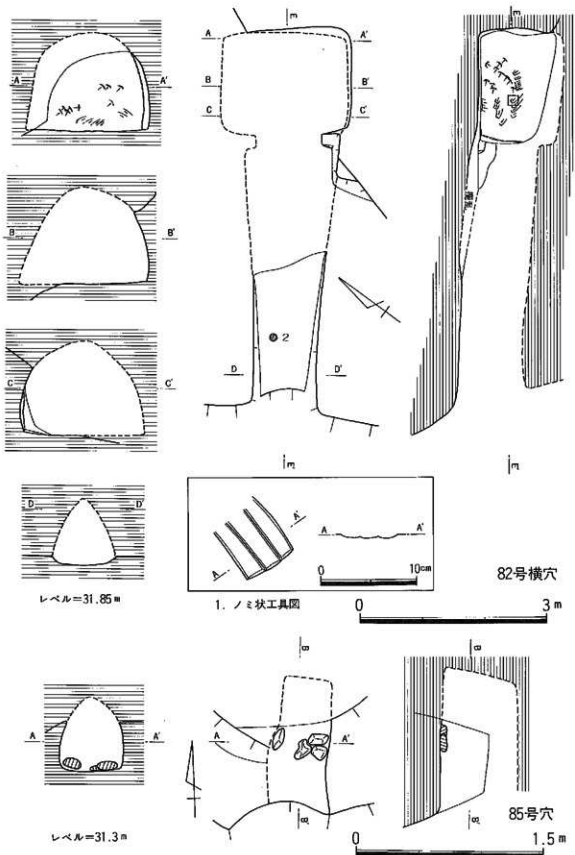
副葬品の出土状態は第23図2の坏蓋以外、玄室内床直上の土をふるいに掛けたところ人の大臼歯と10の直刀の鏝と鞘口金具が出土した。副葬品の組み合わせはあまりはっきりしないが、鉄刀と土器類の副葬のあったことは確実で、金山分類A類に該当するものである。

83号横穴 今回調査された横穴の中では最も保存状況のよいものである。平面形態は玄室と羨道部の違いはまったくない形態で所謂筒型構造(D類)をなすものである。玄室形態は細長い長方形で、無理に羨道部との違いを探すと第22図のDラインとEラインの中間に幅の変換点があるようにも思える。立面形態は鋭く尖らせた尖頭ドーム型をなしている。玄室内には最近の投げ込まれたと思われる(疎群中に戦後の陶器が出土)閉塞石が何点か出土した。床面のものを図示したがいづれも原位置を保つものではない。床面は入口にむかって傾斜しており排水に便利な構造となっている。壁面には82号横穴でも観察された、幅10cm前後の鉄製掘削具の痕跡が一面にみられた。木棺の位置は平面形態から、横穴の主軸方向に対して平行して安置する縦置型、金山分類A類に該当する。ただし、本横穴の幅は60cmにも満たないもので、はたして木棺が入入れられたか疑問だし、追葬可能な横穴であったかどうかとも問題であろう。閉塞石は玄室内や墓前域に閉塞石に使われた石がみられ、閉塞石をもっていた可能性は非常に高い。ちなみに83号横穴・82号横穴・墓前域出土の閉塞石の石材を伊藤通玄先生(静岡大学)に鑑定してもらったところ、ほとんどが砂岩で風化度もなく太田川河岸から採集してきた可能性が高いとのコメントをいただいた。墓前域と羨道の段差は82号横穴の床面と同レベルであり相当

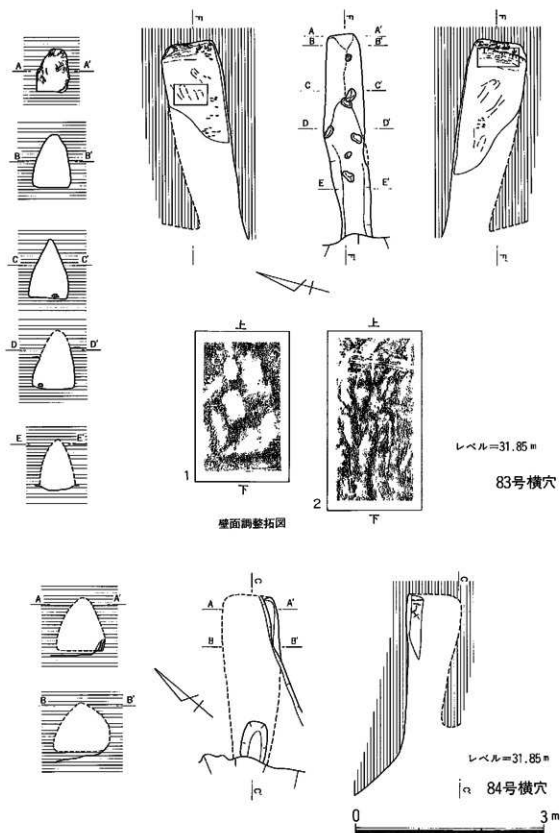
A + B + C + D



第20図 宇刈横穴N群調査区域全側図



第21図 82号・85号横穴実測図



第22図 83号・84号横穴実測図

高いものであることがわかる。副葬品の組み合わせは擾乱のためまったくわからない。

84号横穴 本横穴は過去の土取りと今回の基礎工事で9割以上破壊されていたが、奥壁と東側壁、羨道入口のごく一部が残存していたことから平面形態が推定できた。平面形態は83号横穴よりもやや規模の小さな玄室と羨道部の違いがまったくわからない筒型構造をなすD類に該当するものであろう。断面形態もすべて失ってはいるものの、鋭く造り出された尖頭形アーチ型になると思われる。敷石については床面が破壊されているため、存在したかどうかはわからない。木棺の位置は平面形態からみると、横穴の主軸方向に対して平行して安置する縦置型、金山分類B類に該当するが、横穴の規模からみて追葬はおろか木棺そのものが埋葬できたかどうか疑問である。閉塞石はまったく残っていないが、墓前域から閉塞石らしいものも出土しているの、閉塞石は存在していたと推定しておきたい。墓前域と羨道の段差は、82号横穴と同じ床レベルであるため相当高かったと思われる。副葬品の出土状態はまったくわからない。

85号横穴 今回の工事の基礎工事のために、奥壁と天井部が破壊されているしているため、全体の平面形態は明らかではないが、全長1mにも満たないいわゆるミニ横穴であると思われる。平面形態は玄室と羨道部の違いが認められない筒型構造をなし、D類に該当すると思われる。断面形態は削平のためはっきりしないが、他の横穴同様鋭い造りの尖頭形アーチ型になると思われる。玄室内に敷石があったかどうかについては玄室の大半が破壊されているためわからない。残存している平面形態がD類になりそうなこと、木棺の位置は人体が埋葬しうる規模を有しないため、改葬ないし火葬された人骨を、木櫃や袋等にいれて葬ったと推定される。閉塞石は入口部分に主軸方向に対して石の長軸方向が平行するように詰められていたが、調査時の不手際でほとんどはずしてしまい、第21図に示した程度しか原位置を特定しえなかった。副葬品の出土状態はまったくわからない。

iii) 遺物

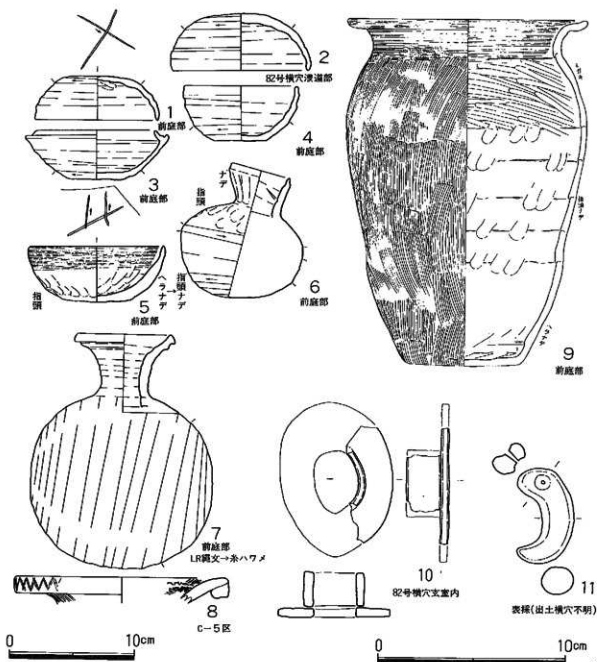
字刈横穴N群からは、須恵器や土師器などの土器類のほか、直刀などの鉄製品が出土し、比較的どの横穴群にも典型的に見られる副葬品が出土している。以下種類別に説明を加えたい。

須恵器・土師器・弥生土器

須恵器 坏身・蓋については最大径が11cm代になる2の坏蓋、3の坏身、最大径が10cm内外になる1の坏蓋、底部は平で口径10cm内外になる坏身・坏蓋の逆転した坏身の4がある。11cm代のものをA類、10cm内外のものをB類、口径10cm前後になる坏身・坏蓋逆転したものをC類として分類しておく。A類坏身の3は短く外反した口縁部形態で新しい要素がみられる。2の坏蓋も形骸化した沈線が口縁部に巡っている。ヘラ削りの範囲はいずれの坏身・坏蓋も狭く螺旋状に2回転施されている程度である。B類の坏蓋については形骸化した沈線もなく、ヘラ削りも同心円状に2回転で範囲も狭い新しい特徴をもつものである。C類については底部は平に仕上げられ、口縁部には形骸化した沈線がみられ、体部は比較的深めに作られている。坏身・蓋はA類については遠江須恵器編年でⅢ期末（7世紀初頭）、B類についてはⅥ期前半（7世紀中頃）、C類についてはⅣ期後半の古い段階（7世紀後半）に該当すると思われる。

瓶類については6の平瓶、7のフラスコ瓶がある。平瓶は小形品であるため型式の特徴を捉えにくい、全体の形態をみると肩が張らず比較的古い特徴はあるが小形品としての特徴と考えられ、Ⅳ期前半に該当すると考えられる。7のフラスコ瓶は小形のもので頸部も短く古い特徴もあるが、球形胴となっているため概して新しくⅣ期前半に該当する製品と思われる。

概報でも指摘したが（袋井市教育委員会 1985）、須恵器の中で1・6・7については色調も暗灰



第23図 土器・鉄製品実測図

色を早し調整も湖西産のものにとくらべると粗雑であることから、後藤健一氏のご教示どおり東遠江で作られた可能性が高い製品である。最近の調査では森町金谷窯でⅣ期前半の製品（静岡県教育委員会 1989）、袋井市衛門坂窯でⅢ期中葉の製品を焼成していることが判明してきており（袋井市教育委員会 1989）、現在所在不明ながら太田川流域にさらにⅢ期後～末の製品を焼成する窯群も存在しているのだろう。また、1、6・7以外の須恵器は湖西産の製品と考えられる。

土師器 5の坏と9の長胴甕が出土している。5の坏は口径10cm前後になる小形の坏で、口縁も短く立ち上がる新しい特徴をもつもので、遠江須恵器編年Ⅳ期前半に伴うものと考えたい。

9の長胴甕は口縁が水平近く外反する、非常に薄手の甕である。胎土も茶褐色を呈し金雲母を含む

特徴があり、8世紀代の甕の特徴を示す。胴部最大径と底部の差が少なく7世紀代の甕の形態的特徴を残すが、口縁部の水平度は8世紀代の特徴を示す資料であり、これらの特徴から7世紀末～8世紀初頭に該当すると考えたい。また、体部に煤の付着も見られず全体の残存率は半分程度であるが、保存状況はよく未使用の製品と考えられる。

弥生土器 8は折返口縁の壺形土器の口縁部で、内面S字結節の縄文、口縁端部にジグザクに刺突文が施されている。弥生時代後期後半新段階の資料と思われる（袋井市教育委員会 1991）。

鉄器・玉類

刀装具 19は無窓の鐔で、鞘口金具が銷着している。よって、82号横穴には直刀が最低1本は副葬され、しかもその直刀は鐔付で鉄製の鞘金具が伴っていたと考えられる。

勾玉 11の勾玉は地元で採集され、どの横穴から出土したかは特定できないものである。長さ5cm程度のやや大きめのサイズの勾玉で、頭部穿孔部分を窪ませた後に、穿孔する特徴をもつ。白と黒色の岩脈が縞状に走る当地域では珍しい石材を使用している。石材は不明であるが、軟質である。

iv) 小 結

宇刈横穴N群の一つの墓前域を共有する1小単位群、4基の横穴から構成される横穴群であることが判明した。わずかな基数であったが、総数100基からなる大規模横穴群である宇刈横穴群の一角を小単位群ではあるが、大規模横穴群の様相を一部ではあるがいかにも見ることのできた意義は大きい。

さてN群の各横穴の築造順位は、玄室内遺物がほとんどなかったため明確ではないが、墓前域出土の上器類や横穴の配列、墓前域の段差などからみて、82号横穴が最も古く、以後83号と84号横穴続いて最後に85号横穴が築造されたと思われる。82号横穴は6世紀末、83号と84号横穴は7世紀中頃、85号横穴は8世紀初頭にはいつからの築造と思われる。

追葬については、82号横穴で7世紀中頃に1回行われ、その他の横穴については横穴の規模からみてはたして追葬可能な横穴かどうか、とくに85号横穴は人体が入る大きさではなく、改葬ないし火葬人骨が埋葬された横穴と考えられる。すなわち、7世紀中頃から8世紀初頭まで築造が続く終末期の群集墳に分類されるタイプの群集墳（Ⅱa類群集墳 松井一明 1994）である浜松市半田山古墳群（浜松市遺跡調査会 1984）や袋井市山田原古墳A群（袋井市教育委員会 1994）で、7世紀中頃～8世紀初頭築造の小形化した追葬不可能な横穴式石室が出現してくる現象と連動するかのようである。83号と84号横穴の墓前域底面近くで出土した完形率の高い土器類については、横穴の小形化に伴い本来玄室内で行うべき祭祀をおそらく羨門付近で執り行ったため、早いうちに墓前域に転落したものと考えられる。事実、山田原古墳A群の追葬不可能な横穴式石室の羨門ないし羨門近くの周溝からも、完形率の高い須恵器が出土している。横穴の単次葬化も横穴式石室と同じく7世紀中頃から始まるのだろうか。ただし、前田庄一氏が概報で考えたように小形した横穴（ミニ横穴は除く）が、比較的宇刈横穴群に多く見られることから、時期差により出現するのではなく宇刈横穴群の特徴的な形態であるとの指摘もある。しかし、平面形態を検討すると、築造が小単位群中一番古い82号横穴が横長の長方形形態の玄室となり横置型木棺位置と推定されるのに対して、築造が降る83号と84号横穴がおそらく木棺に埋葬されない縦置型になると考えられ、N群のなかでは時期差をもって横置型から縦置型の埋葬形態に変化したようである。この変化は明らかに横穴の小形化に伴うものであったといえよう。

立面形態は落盤しているものもあるが、概して何れの横穴も鋭い造りの尖頭形になると思われ、前章でも触れた通り明確な尖頭形を呈する太田川水系の宇刈横穴群の中核をになう系統を示し、もちろん八幡山横穴群、地藏ヶ谷横穴群、金山横穴群のような原野谷川流域の横穴群とは一線を画する形

態をなすものいえる。

85号横穴はいわゆるミニ横穴である。ミニ横穴は遠江でも掛川市岡津横穴B群でも発見され（大谷純仁他 1968）、宇刈横穴N群と同じように墓前域の正面ではなく側面にミニ横穴が造られている。ミニ横穴は伊豆の北横穴群でも多数確認されている（伊豆長岡町教育委員会 1981）。大北横穴群は7世紀中頃から8世紀後半まで築造の続くⅡb類分類される終末期の横穴群で、追葬可能な横穴の脇などにミニ横穴が造られている。墓前域の状況が同じではないため一概には比較はできないが、追葬可能な横穴をさけるように築造されたことは共通事項として確認しうらる。すなわち、横穴の単次葬化が7世紀中頃に始まり、8世紀になると追葬どころか人体の入らない木櫃ないし袋のようなものに改葬か火葬された人骨を埋葬する墓制に変化したことを物語る資料で、例えば山田原7号墳のような横穴式石室が形骸化した石囲いのようなミニ石室が出現してくる状況と同じ現象であろう。このように、N群では当初は比較的大形の82号横穴が築造されるが、急速に横穴の小形化が始まり、ミニ横穴の出現がなされ、後期群集墳と同じく横穴群内でも同じような終末期現象を確認しえた小単位群として注目される。

出土した副葬品については、現状では82号横穴が通例見られる土器類のほか鉄製鞘金具もつ直刀の副葬が推定され、小単位群中唯一直刀を副葬していた横穴と考えられる。以後7世紀～8世紀築造の横穴については直刀の副葬は急速になくなると考えたいが、各横穴の保存状況が悪いため予測の枠に留めておきたい。墓前域から出土した未使用の長胴甕について注目すると、まず7世紀後半～8世紀初頭の年代を与えることから、小単位群のなかではもっとも新しい年代を示す資料である。類例資料としては、浜岡町門屋横穴群連の前支群4号横穴の墓前域から出土した甕がある（浜岡町教育委員会 1985）。横穴の築造年代は出土須恵器から8世紀初頭になると考えられ、墓前域から出土した長胴甕の型式も8世紀前半期に編年することに矛盾のないものである。写真でみる限り煤の付着はなく未使用の甕であるらしい。連の前4号横穴、宇刈横穴N群とも完形で出土していない点、宇刈N群では相当浮いた状態で出土した点などが気にかかるところであるが、どちらも未使用であることを重視すると、火葬ないし改葬した人骨を埋納した蔵骨器として利用されたか、他の土器類と同様に墓前祭祀に用いられたものとのいずれかであろう。類例が少ない現状では予測に近い考え方であるが、どちらも8世紀初頭に該当しそうな資料であることと、確認例が少ないことなどから、前者の蔵骨器の可能性を考えてみたい。8世紀初頭の蔵骨器だとすると、ミニ横穴との関係がでてくるだろう。横穴が終末期を迎えるなかでミニ横穴と土師器長胴甕が出現してくる状況が、藤枝市原古墳群白砂ヶ谷支群や敷田古墳群三ツツ池支群等（藤枝市教育委員会 1980）で確認されてきているミニ横穴式石室と蔵骨器になると思われる須恵器蓋付広口甕がセットで出現してくる状況と連動しているとも考えられるのである。

以上のように宇刈横穴N群は、横穴の終末期、あるいは後期群集墳の終末期との比較を考えるうえで貴重な資料を提供しえたものと考えたいが、各横穴の明確な築造年代を明らかにしえなかったため予測の域に留めざるをえなかった。今後の資料の蓄積ををまきたい。

第6章 東別所古墳群

i) はじめに

二村化学工業株式会社が袋井市鷺津地内に工場建設を計画し、建設予定地内に埋蔵文化財の所在の有無を確認を、文書にて提出してきたのは昭和38年4月8日のことであった。これを受けて教育委員会は早速用地内の埋蔵文化財の所在についての現地確認を専門研究者に依頼して実施したところ、袋井市鷺津西ノ谷85番地に東別所1号墳・2号墳が存在していることが判明した。とくに、1号墳については全長20mを測る前方後円になる可能性も指摘された。この所在結果については昭和38年4月15日付けの文書で解答された。この結果を受けて、二村化学工業株式会社は埋蔵文化財の発掘調査の実施を決定し、教育委員会との協議のうえ調査担当者に下津谷達男（当時野田市博物館館長）、西宮一男（当時茨城県立入郷高校）、大谷純仁の3氏に依頼し、昭和39年8月18日～8月31日の期間で発掘調査を実施した。残された記録からみると、調査に至る経緯としてはかなり早い段階で事前協議がなされ、発掘調査の実施となつたらしいことがわかる。

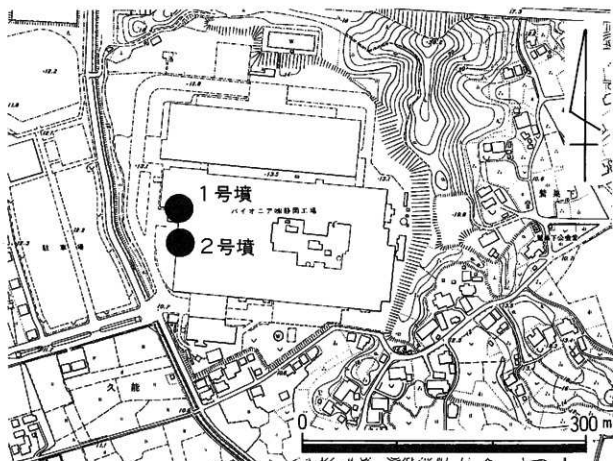
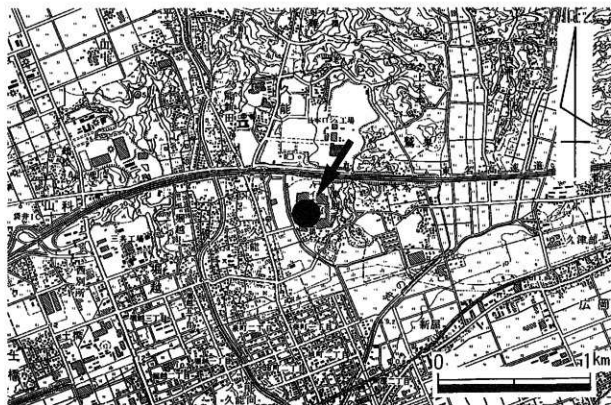
東別所古墳群は第24図に示したとおり、現在のパイオニア工場用地内に所在していた。北方丘陵には、昭和45年に日本ロシェ工場建設のために発掘調査された東山古墳群が分布している。東山古墳群は全長29mを測る前方後円墳（6号墳）を含む6基の所謂木棺直葬墳が、発掘調査の対象となった。旧地形から検討すると、東別所古墳群もこの東山古墳群の立地する一連の痩せた丘陵上に位置していたらしい。よって、東別所古墳群は東山古墳群に含めて考えることもできよう。

ii) 古墳の形態・主体部

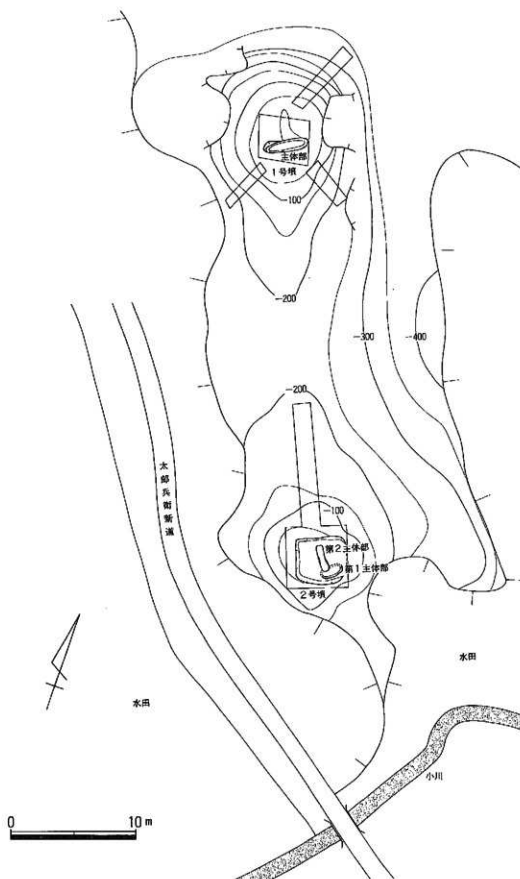
形態 古墳の立地は南北に伸びた狭い丘陵地の南先端に2号墳、隣接してすぐ北側に1号墳が立地している。古墳の形態は1号墳が全長20m、高さ2mを測る前方後円墳、2号墳は直径10m、高さ2mを測る円墳であった。1号墳は直径10mの後円部を北に向け、全長10m、高さ0.5mを測る低い前方部が取り付いている。いずれの古墳も盛土はほとんど確認されない、当地域特有の地山削り出しの古墳、すなわち、自然の地形を巧みに整形して盛土をほとんどすることなく墳丘を造り出す手法で築造された古墳であることが判明した。外部施設である埴輪や葺石は確認されなかった。2号墳の墳丘各所から第29図1～5に示した古式土師器が出土したが、直接古墳の年代を示す資料ではないため、古墳の周辺に古式土師器初頭期の何らかの遺構が存在していた可能性が指摘できる。

主体部 1号墳、2号墳ともに主体部になると思われる落ち込みが確認されている。1号墳では長さ3.3m深さ0.5mを測る船底状の墓坑が検出された。実測図の断面形態から判断すると、短い割竹形木棺とも考えられるが、墓坑底面が西端にいくと浅くなり棺幅も東端に比べると極端に狭まるため、確証はないが長さが短い舟形木棺の可能性も指摘しうる。副葬品は棺中央より西側に管玉3とガラス丸玉7の玉類と刀子2、鉄釵1が出土している。玉の位置が埋葬者の頭部位置を現すものであるならば、西方頭位で頭部付近に刀子を副葬した姿が復元される。

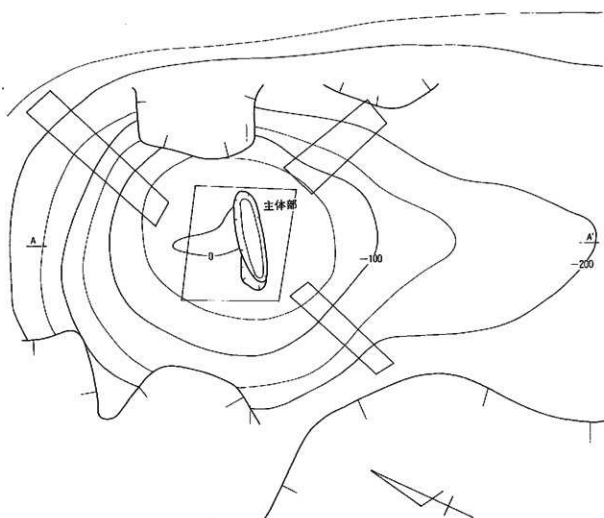
2号墳については2基の主体部が確認された。第1主体部は長さ1.8m、深さ0.2mを測る楕円形の墓坑、第2主体部は長さ2.1m、深さ0.5mを測る長方形の墓坑が確認されたが、第2主体部については西端の小口部分が明確でないため、もう少し長い墓坑であったと推定される。墓坑の形態からみて、第1主体部は土坑墓、第2主体部は長さが短い型式になる箱式木棺であると思われる。第1主体部からは副葬品がまったくみられないこと、第2主体部に先行しそうなこと、木棺でなく土坑墓になりそうなことから、2号墳の墳丘で出土した古式土師器に関係した遺構、すなわち2号墳と古式土師器初



第24図 東別所古墳群位置図



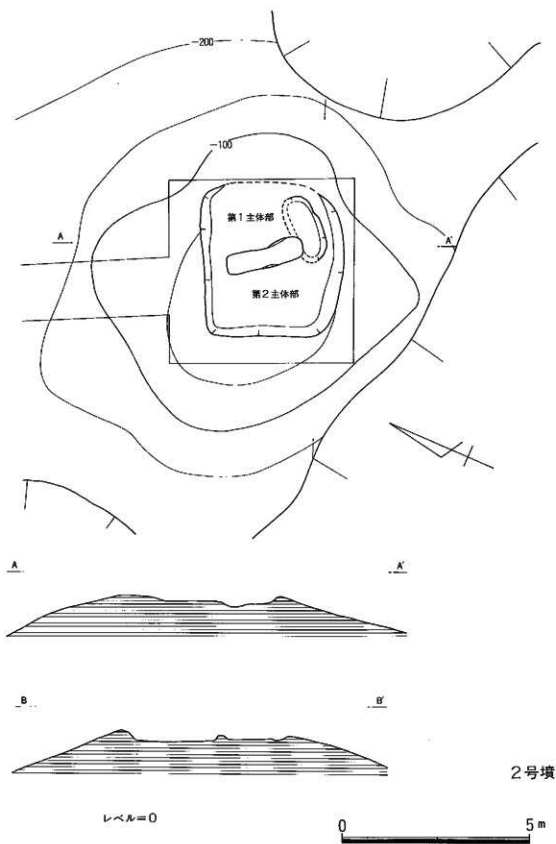
第25図 東別所古墳群全体図



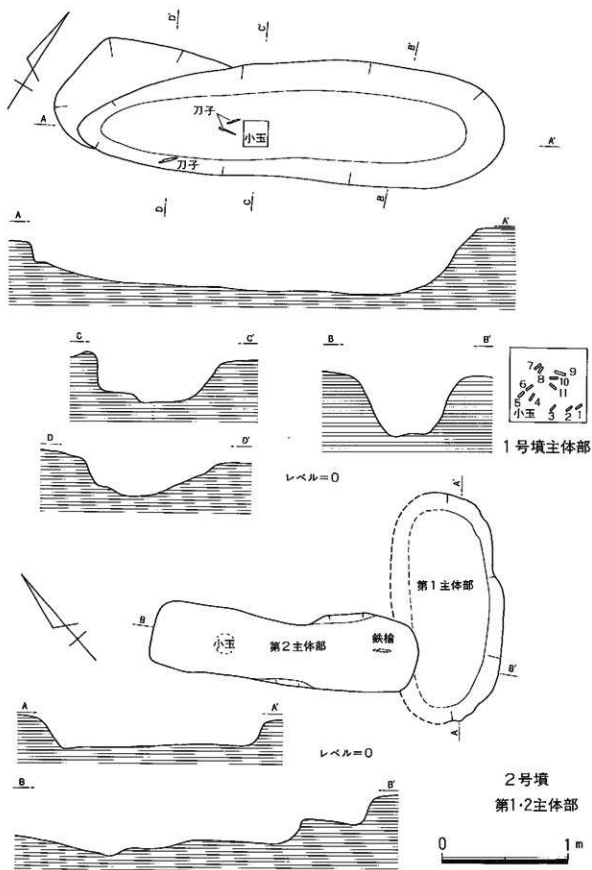
レベル=0

1号墳
0 5m

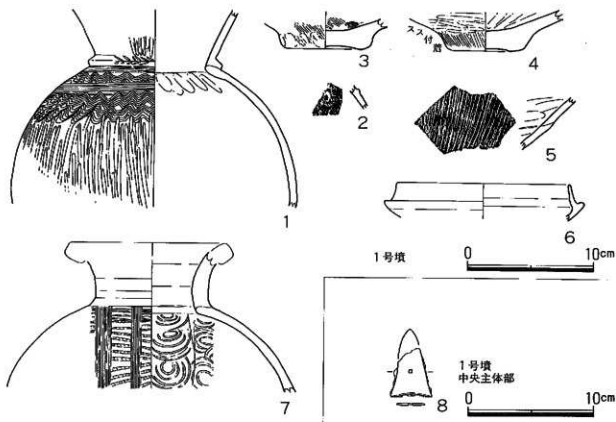
第26図 1号墳実測図



第27図 2号墳実測図



第28図 1号墳・2号墳主体部実測図



第29図 土器・鉄製品実測図

頭期に築造された方形周溝墓が重複していたとも判断される。第2主体部からは鉄槍先端1とガラス小玉11が出土している。1号墳同様玉類の出土位置が頭位方向になるならば、西向頭位が推定され、足元には切先を足元方向に向けた鉄槍（鉄鉦？図版17参照）の副葬があったといえよう。

iii) 遺物

東別所古墳群出土の遺物については、第29図に示したものの以外見つけ出すことができなかった。図示しえたものだけ説明を加えたい。

古墳の直接の副葬品としては8の中央に穴が穿たれ、非常に薄手で実用品とは思えない無茎鉄鏃がある。この型式の鉄鏃は5世紀中頃中心として出土するもので、5世紀前半～5世紀後半までの年代幅で出土例がある。刀子の年代が気になるが、一応5世紀中頃に該当する資料と想定しておきたい。

2号墳墳丘からは古式土師器になる1～5と6・7の須恵器が出土した。古式土師器は1・2ともに頸部に3角突帯、肩部に櫛描波状文、横線文などが施されている古式土師器のなかでは最古の要素をもつもので、東遠江古式土師器編年Ⅰ期（B類S字甕平行期 松井一明 1990）に該当する資料であろう。5はS字甕の破片で、胎土からみると1・2とともに天竜川以西からの搬入品である可能性が高い。

6の坏身は最大径16cmを計り、口縁の立ち上がりも直立する古い型式の特徴をもつものである。7の壺も体部に縦位カキメとが施され横瓶になるものと思われる。6は遠江須恵器編年Ⅲ期前半（6世

紀中頃)、7についてはⅢ期中頃(6世紀後半)まで降る製品と思われる。

iv) 小 結

東別所古墳群は、1号墳が全長20mを測る前方後円墳で、主体部出土の鉄鏃の年代から5世紀中頃の築造と考えた。2号墳については直接の築造年代を示すものか不安であるが、墳丘出土の須恵器の年代から6世紀中頃～後半とみられる。さきに述べた東山古墳群の古墳群としての築造年代幅も5世紀前半～6世紀後半までで似たような傾向を示すが、1号と2号墳は至近距離で隣接しており築造年代が1世紀近くもあることは疑問である。2号墳の築造年代を須恵器にとらわれることなく、主体部出土の副葬品に鉄槍(鉄鏃?)が含まれることを重視すると、やはり5世紀後半あたりの築造とみるのが妥当なところであろう。とすると、おおむね東山古墳群の築造年代幅のなかで収まるため、東山古墳群とともに当地域のなかでは比較的良好にみられる5世紀前半～中頃に成立するタイプ(B2類 松井一明 1994)の初期群集墳に該当するものと考えられる。

さて、中遠江地域での近年全長20m前後を測る規模の前方後円墳の存在についての再検討が迫られている。以下、全長20～30m測る袋井市域及び近隣での前方後円墳について検討してみたい。

愛野向山A 1号墳は地形測量では低墳丘の前方後円墳ともみられたが、発掘調査の結果から弥生時代中期末の方形周溝墓であることが判明した(袋井市教育委員会 1986)。

東山6号墳は全長29mを測る前方後円墳と考えられてきた古墳である。築造年代の決め手となってきた小形内行花文鏡については、最近の検討結果からみると出土主体部の位置が前方部にあり主体部の型式も小口板の痕跡をもつ古式なものと、前方部出土の須恵器が6世紀中頃～後半のものであることから、古墳の築造年代と内行花文鏡の副葬年代が合わないことが指摘しうる(袋井市教育委員会 1993)。後円部の主体部の副葬品が玉類に限られることから一層築造年代の決め手に欠く結果となっている。出土須恵器を基本にすると築造年代は6世紀中頃～後半にかけてであろうか。

掛川市高代山古墳群4号墳が発掘調査され、全長29mを測る前方後円墳として報告されている。後円部の明確な主体部は発見されなかったが、墳頂部より鉄鏃や鉄針、鉄針、須恵器破片などが出土している(掛川市教育委員会 1970)。鉄針が気になるところであるが鉄鏃や須恵器の年代は5世紀後半に属すると思われる。

未調査の前方後円墳としては全長29mになる宇佐八幡境内1号墳が存在する。付近の首長墓の動向から6世紀初頭～前半の築造時期と考えてみた(松井一明 1992)。

長者平2号墳は全長30m測る前方後円墳で、墳丘裾部から出土している器台の年代は6世紀前半～中頃のものであった(袋井市教育委員会 1981)。総数100基からなる大規模後期群集墳である長者平古墳群の先駆けとなる古墳との位置づけがなされている。

以上のように袋井市域の全長20～30mクラスの前円後円墳は、いずれも20～30mの規模を測り、20mまで小形化したものは認められない。まして、5世紀後半の年代を与えられるものは高代山4号墳のみであるため、はたして当地域で5世紀代で全長20m前後を測る前円後円墳が存在するのかどうかさらなる資料の増加をまって結論づけたほうが良いと思われ、今回は前円後円墳の可能性のある程度の提示に留めておきたい。

第7章 補遺 金山古墳群・横穴群の出土遺物

i) はじめに

金山古墳群・横穴群は1次調査が昭和47年度、2次調査が平成3年度に実施された。今回補遺として掲載した資料は1次調査分の本棺直葬墳の3～5号墳墳丘、A4号横穴玄室出土の資料である。

ii) 遺物

3～5号墳については弥生時代中期末、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、中世の上器が、A4号横穴からは土師器が新たに確認された。以下種類別に説明を加えたい。

須恵器 坏身・蓋については最大径が13cm内外になる1・10の坏蓋が出土した。口縁端部に形骸化した面をもつ。形態的特徴から遠江須恵器編年Ⅲ期前半（6世紀中頃）の製品と思われ、おそらく11の坏蓋天井部の破片も同時期か1段階降る製品になると思われる。

有蓋高坏の蓋のつまみと思われる2が出土している。つまみ全体がへこみながらも中央がやや突起する形態的特徴から、短脚1段透高坏の蓋と考え、Ⅱ期に該当する資料かと思われる。

壺ないし甕の破片と思われるものに、3～5、13～16がある。外面叩き後カキメが施され内面明瞭な青海波文を残す3・4はⅡ～Ⅲ期前半の資料、外面細かな平行叩き、内面ナデ整形の12～15はⅣ期に該当する資料と思われる。

土師器 17は口径12cm前後を計り口縁も内彎する古い形態をなし、遠江須恵器編年Ⅲ期後半に伴うものと考えられる。20の高坏は1号横穴からも出土している有蓋の短脚高坏で、Ⅲ期後半に伴う資料と考えられる。21の小形広口壺については該当年代はわからないが、高坏同様Ⅲ期後半のものであろう。18の広口壺は当地域では6世紀代において普遍的に見られるものであるが、該当年代についてはそれ以上絞り込めない。

弥生土器 6・7の土器は破片ではあるが縦方向の櫛文が規則的に配されるもので、中期末の白岩式の特徴を示す資料である。19は弥生時代後期～古式土師器の胎土・色調を示すものであるが、明確な該当時期はわからない。

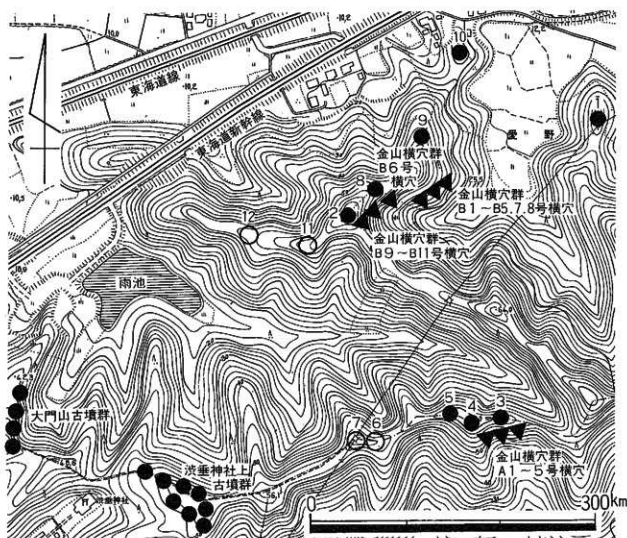
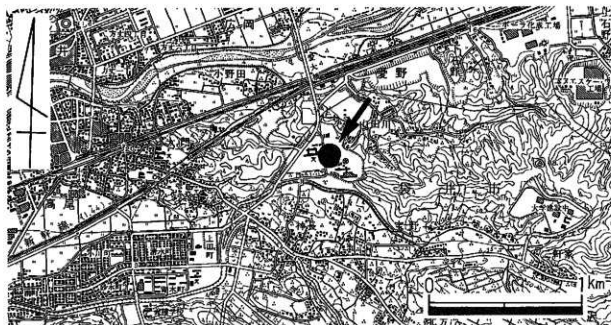
中世陶器 中世の蔵骨器ないし経塚外容器と思われる、小破片ながら片口鉢と壺の組み合わせになる中世陶器が出土している。いずれも12世紀末～13世紀前半に該当する常滑産の製品と思われる。

iii) まとめ

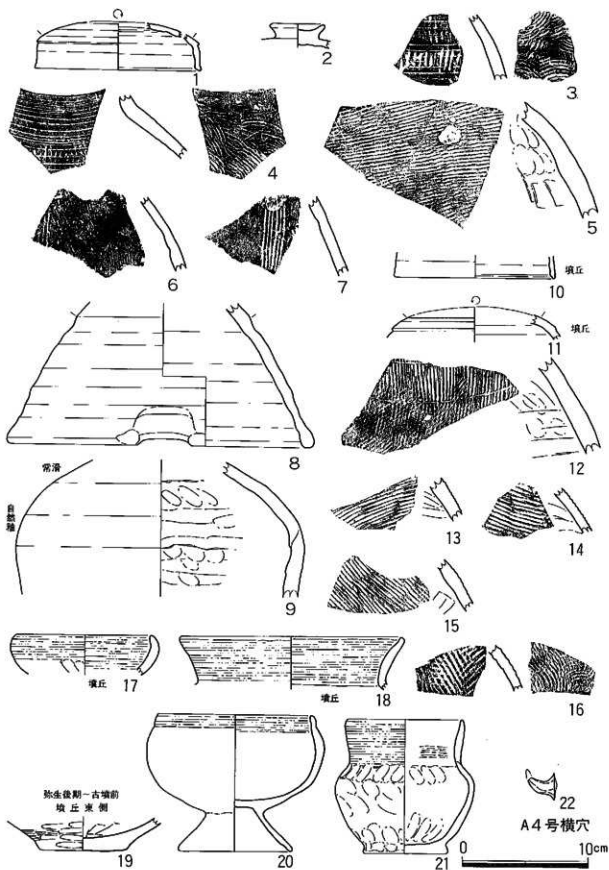
3～5号墳出土の須恵器については、古いグループは遠江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前半（6世紀前～中頃）の資料、新しいグループについてはⅣ期の7世紀代の資料に該当し、前回の報告書した資料としては何ら変更を加える必要はないものと思われる。しかし、弥生時代中期末の土器について注目してみると、出土地の立地条件からみると集落出土の土器と考えるよりも、5号墳が弥生時代中期末の方形周溝墓と重複していた可能性が高いと思われる。

4号横穴出土の土師器は6世紀後半を主体とするもので、前回報告書で提示した7世紀中頃のフラスコ瓶の資料とあわせて考えると、4号横穴は6世紀後半築造で7世紀中頃に追葬された横穴であることが判明した。よって金山横穴A群は1～4号横穴が6世紀後半の短期間にすべて築造され、5号横穴が7世紀前半に築造されたと訂正したいが、築造順位の変更はないと思われる。

中世陶器の出土からは5号墳が中世墳墓か経塚として再利用された1例となった点重要であろう。



第30図 金山古墳・横穴群位置図



第31图 土器実測図

第8章 袋井の群集墳と横穴群を考える(2)

一 遠江における横穴群の地域色と古墳時代後期の交通路について

i) はじめに

中遠江地域の横穴群については、すでに第2章にでも述べた通り大規模横穴群の分布を検討すると、袋井市域東西方向の2つのルート(交通路)が存在した可能性が高いと思われた。さらに、第3章・第4章で道ヶ谷横穴群と八幡山横穴群について検討してみたところ、至近距離にありながら平面・立面プランに若干の地域色がみられたことから、これらの地域色と2つのルートが関連し合うのか、あるいは横穴群地帯に存在する横穴式石室をもつ後期群集墳の存在、すでに以前考察した横穴式木室の導入の問題(松井一明 1996)などをからめて考えてみたい。また、八幡山3号横穴でみられた、飾り大刀などを保有する横穴の位置付けと、すでに後期群集墳でなされた階層制の問題(新納泉 1983)が、当地域の横穴でもいえるのか見通しをたてておきたい。

ii) 横穴にみる階層制

横穴の階層性については、横穴の規模や所在位置からも加味して考察を進めなければならないが、今回は副葬品の組み合わせのみで考えてみたい。本文中でも触れた通り、金山横穴群で示した副葬品の組み合わせ分類と八幡山横穴群と道ヶ谷横穴B群で分類可能な横穴を示してみたい。

A類=鉄製副葬品のうち直刀の副葬が認められるもの。八幡山3号横穴(6世紀末)、八幡山2号横穴(6世紀末)、道ヶ谷B1号横穴(7世紀初)、道ヶ谷B2号横穴(6世紀末)、道ヶ谷B3号横穴(7世紀中)、宇刈82号横穴(6世紀末)

B類=鉄製品の副葬はあるが、直刀の副葬がないもの。

C類=土器類(玉類も含む)のみの副葬しかないもの。八幡山1号横穴(7世紀中)、道ヶ谷B5号横穴(7世紀初)

以上の分類となるが、今回報告の八幡山3号横穴については素環鏡板付簪と飾り大刀を含むことから、別分類が必要となった。とりあえず他の横穴の状況を加味してA類を以下のように細分しておきたい。

A1類=飾り大刀が認められるもの。また、馬具については伴うものと伴わないものの2種類がある。前者をA1a類(八幡山3号横穴)、後者をA1b類とする。

A2類=馬具のみを伴うもの。

A3類=直刀のみを伴うもの。

さてこの分類から、簡単に階層性を読み取ることはできない。それは、八幡山横穴群にみられる通り7世紀中頃以降直刀の副葬が極端に減ってくることである。この状況は金山横穴群でも認められ、おそらくこの分類が有効なのは、6世紀後半～7世紀前半までに築造された横穴に限られると思われる。以上の状況から副葬品のランクを小単位群ごとに分けてみたい。八幡山1～3号横穴小単位群はA1類ランク、道ヶ谷B1～3号横穴小単位群はA3類ランク、道ヶ谷B5号横穴はC類ランク、宇刈横穴群はA3類ランクに該当する。

ちなみに、前回報告の金山横穴群の小単位群のランク分けをしてみると、金山A1～5号横穴小単位群はA3類ランク、B1・2号横穴小単位群はA3類ランク、B5・7・8号横穴はB類ランク、B6号横穴はC類ランク、B9～11号横穴はA3類ランクとなる。

これらの結果から、横穴群の階層制を考えると、(1) A 3 類ランクが普遍的に見られるが、7 世紀中頃以降（遠江須恵器編年Ⅳ期前半以降）は急速に直刀あるいは鉄鋳を含む鉄製武器の副葬意義が減少すること、(2) 1 基単独で構成される小単位群では C 類ランクのものが多く、(3) 八幡山横穴群の 3 号横穴にみられた A 1 類ランクの副葬品は特異例であることの 3 点が指摘しうる。

ここで横穴群の規模に注目してみると、道々谷横穴 B 群は至近距離にある A 群を含めても総数 10 基程度の小規模横穴群に属する。八幡山横穴群については付近にはズン坂横穴群が存在し、総数 20～30 基は降らない小規模横穴群に属する可能性が高い。宇刈横穴 N 群は総数 100 基は降らない大規模横穴群に属する。金山横穴群は A 群・B 群ともに総数 10 基程度からなる小規模横穴群であるが、B 群については山田川が形成する谷間には総数 30 基は降らない中規模横穴群である愛野向山横穴群が存在し、この横穴群に属する可能性も残されている。共通する事柄は、横穴群の規模の大小にかかわらず A 3 類ランクの小単位群を必ず含むことであるが、複数の小単位群を形成する横穴群の中にのみ B・C 類ランクの横穴群を含むことである。大規模横穴群であるがうえの副葬品からみた階層制は N 群からは読み取れなかった。その理由は主要横穴である 82 号横穴の副葬品の全内容がわからなかったこととはもとより、N 群の位置関係をみると宇刈横穴群の支群のなかでは主体をなすものではない可能性が高いと思われる。ここで八幡山横穴群の小単位群との比較を試みると、八幡山横穴群は副葬品では最高ランクの小単位群に属することは確実で、中規模横穴群の頂点にたっていた小単位群であったことが指摘される。とするならば、大規模横穴群では支群規模でしかない中規模横穴群に最高ランクの副葬品がみられるということは、大規模横穴群では支群ごとに最高ランクの副葬品を保有する横穴が存在する可能性があるといえるのだろうか。大規模横穴群の支群を全網した調査例がないためなんともいえないが、中規模横穴群ではほぼ全群発掘調査された地蔵ヶ横穴群の中に、飾り大刀を出す例はないが冠剣らしい副葬をもつ 10 号横穴が含まれていることが報告されている（大谷純仁他 1965）ので、小規模横穴群のなかに最高ランクの副葬品をもつ横穴が存在する。また、大規模横穴群のうち菅ヶ谷横穴群の中に金銅装の飾り大刀の鐔が採集されていることから、飾り大刀を保有する横穴が存在することも明らかになりつつある。ただし、同じ飾り大刀のなかでも八幡山 3 号横穴出土の頭椎大刀の類例は決して多いものではないことから、いかにも特異な状況が看守される。八幡山横穴群の位置に注目すると、第 34 図に示した通り古墳時代後期の主要ルートであるルート 1 に関連し、横穴式石室をもつ群集墳地帯に対する最前線の場所に位置しており、この位置関係からみて八幡山横穴群の被葬者が特別に重視されていた可能性も考えておく必要がある。

以上のランク分けについては、すでに新納泉氏により後期群集墳（岡山県岩田古墳群）などを事例として飾り大刀を頂点としそれ以下に馬具をもつもの、刀をもつもの、鏃をもつものとのランク分けが試みられており（新納泉 1983）、今回の横穴を中心としたランク分けとかなり共通する部分が看守された。しかしながら、すべての横穴群に有効なのか、例えばこのランク分けから外れる小規模横穴群の位置付け、中規模横穴群以上に適応することが可能なランク分けなのか、畿内ではすでに群集墳の終末を迎え、遠江以東に顕著に見られる 7 世紀中頃以降成立する後期群集墳・横穴群のランク分けをどうするかなどの課題が山積み状態である。また、肝心の集落との対応関係、ランクごとの被葬者集団の立場が集落内での遺構にどう現れてくるのか。例えば大規模横穴群である菅ヶ谷横穴群を築造した被葬者集団が居住したと推定される坂尻遺跡では、竪穴住居主体の地区に住む集団、溝に囲まれ竪穴住居と掘立柱建物の混合する地区に住む集団、溝に囲まれ人形掘立柱建物と倉庫群からなる地区に住む集団の存在が確認され（袋井市教育委員会 1994）、当然後者に至るほどランクはあがる階層制を示す遺構配置と思われるが、このような集落での遺構配置のランク分けと、墓域である横穴群

のランク分けがどうリンクしてくるのかといった視点も当然必要となつてこよう。しかし、今回はそこまで考察しうる資料が提示しえなかったため、研究の指針の提示に留めておきたい。

iii) 遠江における横穴の地域色

第2章で中遠江地域を中心として人規模後期群集墳・横穴群の位置関係、及びそれに属するであろう有力集落の位置関係から、古墳時代後期における東西2ルートの主要交通路の存在する可能性を指摘してみた。その交通路の存在を証明するためには、横穴、横穴式石室、横穴式木室など古墳時代後期の各墓制の位置関係・地域色をもう少し厳密に考察を進める必要があるが、まずは現在判明している遠江での横穴の地域色を検討してみることで、当然その地域色を生み出す背後に存在する集団の範囲を限定し、地域間の交流と移動が浮彫となるか検証を試みてみたい。

まずルート1に関係した原野谷川中流域と逆川流域、さらには菊川上流域の横穴の地域色について検討をしてみたい。第32図に現在報告書の形で公開されているこの地域の特徴を代表する横穴を集成してみた。まず西からみると原野谷川中流域に位置する1~5に示した金山横穴群を典型例としてあげてみた。玄室を方形に造り出す1の形態から逆台形になる2の形態、羨道部の幅が玄室に対して広がることにより、玄室の裾部があいまいになり、玄室の形態も明確な長方形にならない3の形態、さらに裾部が消失し玄室から羨道に幅を減じながら移行する4の形態、玄室幅と羨道幅の違いがほとんどなくなり筒型構造になる5の形態に変化する過程が明らかとなっている。しかし、この移行過程は6世紀後半~末のごく短い時間幅でなされたこと、最新段階と思われる5の構造については6世紀後半に築造された小形の横穴に顕著にみられる特徴もあり、一概にはスムーズな形態変化は追えていない。とすると、金山横穴群の祖形になる横穴は一体どんな横穴が想定しうるのか、地蔵ヶ谷横穴群の初現期の築造の横穴である6・7で検討してみたい。何れも6世紀後半でも古い段階の須恵器を出した横穴で、6は敷石から木棺の推定位置が縦置型で玄室の平面形態は縦長の長方形、7は木棺の推定位置が横置型の横長の長方形である。6が基本形で1へと移行するのに対して、7の横置型の玄室形態をもつものは金山横穴群には存在しない。同じ地蔵ヶ谷横穴群の中に7より時期の降ると思われる8の17号横穴が横置型の玄室をもつが、玄室の平面形態は横長の長方形からフラスコ形に変化している。地蔵ヶ谷・金山横穴群については基本形態は縦長の玄室形態のものが多様に変化するようであるが、小敷ながら7のような横長の長方形から8のフラスコ形に変化した系譜も追える。ただし1のように木棺の推定位置が横置型を採用するものがあり、7の影響も少なからず受けていると考えられる。さらに、奥壁付近の断面形態に注目してみると1や6のように古い形態の横穴は玄室幅に対して天井の低い横長の尖頭形となるのに対して、2・3などは尖頭形にならないドーム形に変化しているし、7の系譜のものについては当初からドーム形を採用している特徴が見受けられる。

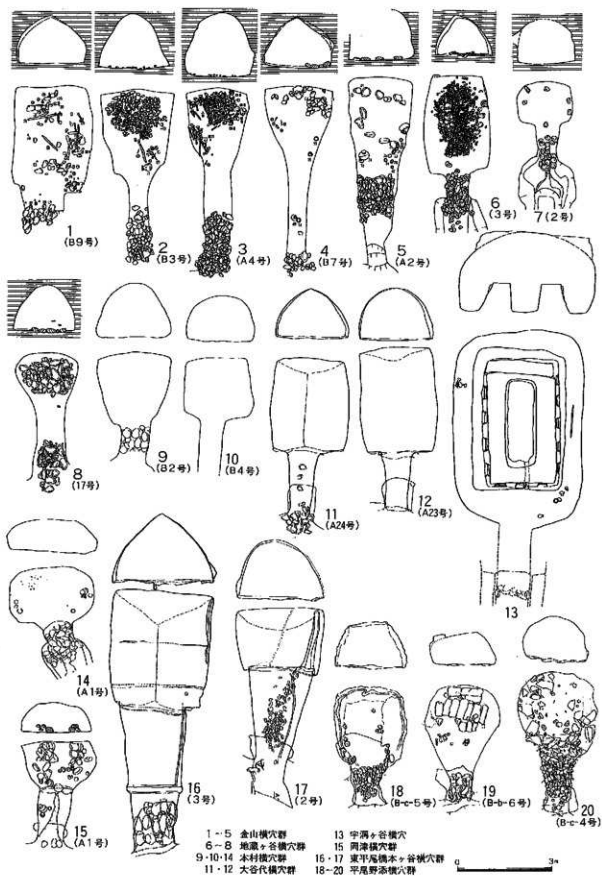
これらの横穴の特徴と逆川流域の横穴群関係はどうなるのか、逆川流域の人谷代横穴群、岡津横穴群、木村横穴群などで検討してみたい。まず11は木棺推定位置は不明であるが玄室が縦長の長方形となり、断面形態が横長尖頭形の古い系譜をもつものに対して、12のように玄室が縦長の長方形であるが、断面形態がドーム形になるものも存在する。10は玄室形態が正方形に近いもの、9は3に近い玄室形態で台形となり裾部がやや不明瞭になってくる形態、断面形態はいずれもドーム形となる。玄室形態が縦長長方形になる系譜の横穴のうち断面形態が尖頭形になるものは、地蔵ヶ谷横穴群では初現期の横穴になると確認されているが、同じ系譜の縦長長方形の玄室形態をもつドーム形の横穴はどうであろうか。群集横穴レベルの横穴ではないが、首長墓クラスの横穴である13の宇洞ヶ谷横穴の断面形態は玄室幅に対して天井が低い横長のドーム形で、造営埋葬施設も造り付けで縦置型を呈している。

(静岡県教育委員会 1971)。「宇洞ヶ谷横穴」の築造時期は6世紀後半でもかなりの古い段階の須恵器を出土しているため、この形態が群集横穴の形態に影響ないし直接の系譜として辿れるならば、原野谷川中流域、逆川流域での初現的横穴の形態は、(1)木棺推定位置が縦置型、玄室形態は縦長の長方形、断面形態が横長の尖頭形になる横穴、(2)木棺推定位置が縦置型、玄室形態は縦長の長方形、断面形態が横長のアーチ形になる横穴、(3)木棺推定位置が横置型、玄室形態は横長の長方形、断面形態が横長のアーチ形になる横穴の3形態が存在するといえようか。またこの3形態の変化は、(1)の形態は1でみたように(2)の影響で成立したと思われる木棺推定位置が横置型の横穴が出現しているので、(2)についても横置型が6世紀後半の新しい段階以降築造される横穴のなかに存在する可能性が高い。

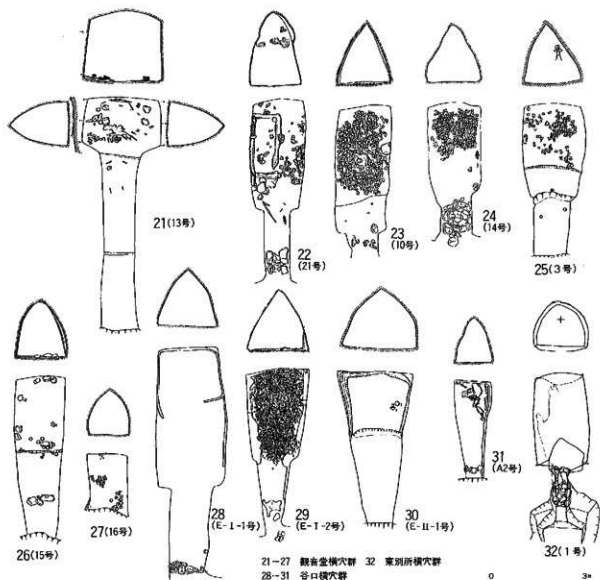
ここで注目したいのは、(3)の形態あるいはその系譜を引く8の存在である。14の本村A1号横穴は玄室形態が袋状に変化し、断面形態も玄室幅に対して天井が極端に低くなる扁平ドーム形ともいえるもので、本村横穴A群の中では8基中2基がこの形態を採用している。岡津A1号横穴の15も玄室形態が寸詰まりのフラスコ形で、断面形態扁平ドーム形になるもので、岡津横穴A群の7基中1基にこの形態が採用されている。さらに、岡津横穴B群でも16基中に1基、地蔵ヶ谷横穴群では27基中5基確認されているので、原野谷川中流域と逆川流域では(1)・(2)の形態が基本形態となり、時期が降ると(2)の形態のみが比較的多く見られるようになると思われるのに対して、(3)の形態とその系譜を引く横穴については群中小数基存在する横穴であるといえる。ただし、三十八坪横穴A群のように4基中2基までもが、(3)の形態を採用する小規模横穴群も確認されているので状況は複雑である(掛川市教育委員会 1988)。おそらく、(3)の形態が主体となる横穴群は小規模横穴群に限られるのではないかと考えられる。

では、(3)の形態が中心的に分布するのはどの地域であろうか。それは菊川水系の横穴群で、典型的な形態の横穴を19・20に示した。19・20とも玄室形態が袋状であるが、断面形態は極端に扁平なドーム形になる19と、やや天井の高い20が存在する。(3)の系譜は基本的に19の石棺位置にみられるように横置型が基本になると思われるが、6世紀後半の新しい段階で早くも縦置型になるものも少なからずみられるようになる。19・20は菊川上流域の6世紀後半～7世紀代の最もポピュラーな形態の横穴であり、下流域の大東町や小笠町などに分布する横穴群も似たようなものが多数存在する。

しかし、18のように袋状形態の横穴の影響で出現したと思われる肘張りの正方形に近い玄室形態、天井は低い扁平な印象を受けるドーム形の横穴も存在する。ただし、確認基数は、平尾野添横穴B群でみると14基中僅か1基しか見られないので、小数派といえる横穴である。この方形ないし長方形の系譜は逆川水系からの影響で成立したとも考えられる。さらに、菊川上流域には逆川流域から直接の系譜と考えられる方形ないし長方形の形態の横穴が存在する。すなわち、16・17に示した東平尾橋本ヶ谷2・3号横穴である。とくに、16は断面形態が横長尖頭形を呈し、逆川流域からの直接の影響をより強くうけて成立したものと考えられる。棺台が確認されているので、横置型の木棺位置が推定され、17も玄室形態が横長の長方形を呈することから横置型の木棺位置が考えられる。ただし、どちらも羨道幅が玄室幅に近いという共通の特徴が看守され、この特徴は原野谷川中流域の羨道幅の広がる形態のものが6世紀末段階には出現するため、6世紀末段階以降の築造時期が考えられる。ちなみに、3号横穴羨道部入り口付近から7世紀後半の須恵器が出土しているが、形態からみてもう少し築造時期は遅いような気がする。さて、16・17の築造時期が新しいとなると、菊川水系の初現期の横穴は今のところ、明確ではないが7の地蔵ヶ谷2号横穴のような、木棺の推定位置が横置型で、横長の長方形プランの玄室形態、断面形がアーチ形呈する横穴が予測されるが、はたして、菊川上流域に16～18の祖形になるような玄室形態が縦長の長方形で、断面形態は尖頭形ないしアーチ形になる横穴が存



第32図 中・東遼江地域の横穴集成図 1



第33図 中・東遠江地域の横穴集成図2

在していないとも言切れないし、7のような横穴が19・20の粗形とすることも確定していない。ひょっとすると13の宇洞ヶ谷横穴のような縦長の長方形の玄室形態でもう少し扁平あるいは尖頭形の断面形態のものが粗形として存在している可能性もあり、今後の資料まちといった感が強い。

ここで、墓前城の造り方に注目したい。八幡山横穴群や道ヶ谷横穴B群などでみられた長方形に造り出された墓前城の発生は、地蔵ヶ谷横穴群でみるかぎり6世紀後半の新しい段階であり、6世紀後半でも古い段階の横穴のグループは個別坂道の先端に墓道と思われる小平坦地をもつだけで、明確な方形に造り出された墓前城はもたない。とすると、原野谷川中流域と逆川流域においては6世紀後半の新しい段階の横穴群中には、ある程度の安定した長方形の墓前城をもつ小単位群がみられるのに対して、菊川水系では地蔵ヶ谷横穴群の初現期の横穴群のような個別坂道の集合体のような小平坦面の墓前城しか見られないため、長方形の墓前城をもつものはついに採用されず、より古い形態を残した墓前城が一貫して採用されていたことが判明してきている。

以上のようにルート1周辺に存在する横穴の地域色をみたが、概ね原野谷川中流域・逆川流域に存在する玄室平面形態が縦長の長方形プランの横穴と、菊川流域の玄室平面形態が横長のフラスコ状ないし袋状の形態、あるいは墓前城の形態から2極分解した地域色になりそうであるが、互いの地域に

も小数ではあるが他地域のものが存在する。このような現象の背景には、厳格に地域圏が別けられていたのではなく、横穴を築造した集団の互いの人的交流もあったことがいえるのではない。また、16・17の横穴は菊川下流域には存在しないことから、同じ菊川水系でも上流域の集団と原野谷川中流域・逆川流域の集団がルート1を使って互いに交流を深めていたと考えられるのではあるまいか。

このような、ルート1の状況に対して、ルート2地域の状況はどうであろうか、今回報告する資料以外の報告例は極端に少なく、僅かに森町周辺部に横穴群の報告例がみられる。第33図21～27は森町観音堂横穴群、28～31は谷口横穴群である。観音堂・谷口横穴群は付近に平蔵ヶ谷横穴群、蔵内横穴群、本堂横穴群などが存在しこれらを含めると、太田川水系では宇刈横穴群に匹敵する大規模横穴群を形成している。玄室平面形態は21の横長の長方形で、断面形態は玄室幅にたいして天井の高い縦長の尖頭形をなす横穴と、22・23のように縦長長方形の玄室平面形態で、断面形態は縦長の尖頭形の2種類が比較的古い形態を残す横穴と考えられる。21の横長長方形の玄室平面形態は、宇刈82号横穴にも共通するものではあるが、群中の基数は非常に少ない。一般的なものはやはり22・23の縦長長方形の玄室平面形態をなすもので、羨道幅が広がる24・25・28がより新しい形態で、29のような玄室と羨道の区別がつくが羨道の幅が入り口に近づくとき狭くなり、玄室形態も台形となり、ついには玄室と羨道の区別のつかない台形状の30・31と、ほぼ筒型構造をなす26・27などの形態に変化してくると思われるが、各横穴の出土須恵器から検討すると、6世紀末～7世紀前半代の極めて短い時間のなかで形態変化したものと思われる。横長長方形の玄室平面形態の横穴は、横置型の木棺位置が推定されるが、縦長のものは22の木棺に関連した小溝遺構の確認されるものや、敷石の形状からおおむね縦置型の木棺位置が基本であったと思われる。しかしながら、縦長長方形の玄室平面形態をもつ横穴の11に明らかに横置型の棺台をもつものや、30などの羽子板形態の玄室平面形態の横穴は、横置型の木棺位置が推定可能となるなど、小数ではあるが横置型の木棺位置をなすものも存在していたといえる。

以上の状況から観音堂・谷口横穴群と宇刈横穴群のなかで比較的古い系譜を引くと思われる横穴の特徴をまとめると、(1)横長長方形の玄室平面形態で、断面形は縦長の尖頭形、横置型の木棺位置が推定される横穴が小數存在すること、(2)基本形態は縦長長方形の玄室平面形態で、断面形は縦長の尖頭形、縦置型の木棺位置の推定される横穴で、(3)小數であるが(2)と同平面形態であるが、横置型の木棺位置の推定される横穴が存在していることから、3系譜の横穴にわけられそうである。今のところ太田川中流域では6世紀中頃ないし後半でも古い段階の初現的横穴の確認例はないが、以上の3系譜の横穴が祖形になっていた可能性は極めて高く、ルート1でみられた状況と一見酷似する。しかし、太田川中流域では何れの系譜の横穴も断面形態は縦長の尖頭形をなすとともに、縦長長方形の玄室形態を採用する横穴は原野谷川中流域・逆川流域の類似の形態の横穴と比較するならば、玄室長に対して玄室幅がより狭く縦長の印象を受けるものが多いこと、小形横穴の中に断面形態ドーム形のものがごく小數確認される以外普通規模以上の横穴にはドーム形の横穴は確認されない、ルート1周辺部に存在する横穴群とは明らかに異なる地域色をもった横穴が存在しているといえよう。ましてや、横長タイプの袋状やフラスコ状玄室形態の横穴を主流となる菊川流域とはかなり異なり、原野谷川中流域・逆川流域にみられた菊川流域系の横穴が点在する状況も全く確認されない。とすると、太田川中流域のルート2の地域は菊川流域の集団とは全く交流が無かったのか、また至近距離にある原野谷川流域・逆川流域の集団との交流も全くなかったのか、その辺をルート2に関係した大規模横穴群である原野谷川上流域に存在する楠ノ谷横穴群、逆川の支流である垂木川上流域に展開する飛鳥横穴群などの状況から検証したいところであるが、発掘調査資料が公開されていないため今回は分析できない。しかし、掛川市教育委員会の調査担当者の松本 男氏や戸塚和美氏のご教示によると、太田川中流域に分

布する特徴的な縦長尖頭形の横穴が存在することが確認されるが、32のような逆川流域の横穴群に関係したドーム形の横穴も少なからずみられるようである。また、ルート1の原野谷川中流域でも北岸の丘陵地に位置する菅ヶ谷横穴群でも、玄室断面形態の縦長尖頭形の横穴がみられることが確認されているので、太田川中流域の集団は原野谷川上流域の集団とも人的交流をもちつつ、さらには原野谷川中流域でも北岸の菅ヶ谷横穴群の集団とも関係をもっていたと理解される。しかしながら、太田川中流域の集団はいまのところ原野谷川中流域南岸と逆川流域南岸の集団と、菊川流域の集団と直接の接触ないし交流をもった形跡は横穴の地域色を検討する限りみられないので、菅ヶ谷横穴群との関係が気にかかるころではあるが、ルート1と2間では頻繁な人的交流が存在した可能性は非常に低いといえよう。しかし、楠ノ谷横穴群や飛鳥横穴群の今後の詳細な資料分析によっては、ルート1と共通する地域色をもつ横穴の比率が高くなる地域とも考えられるし、飛鳥横穴群あたりまでみられる菊川流域の地域色をもった横穴の分布が、ルート2を通じてどの程度北上し西に向かって分布域を広げるか興味深いところであるが、資料的制約から今回の分析は予測の域に留めざるをえない。

IV) 遠江における後期群集墳・横穴群と交通路

以上のように中遠江と東遠江地域なかで菊川上流域における横穴の地域色の分析を通じて、第2章で述べた2つの交通路についての検証を試みたのであるが、大規模横穴群の分布・横穴の地域色とこの2交通路とが微妙にリンクしている状況が存在することが理解して頂けたと思われる。さらに、その他の考古学資料とともに検証を進めることができるのか、共通する墓制地域圏に交通路を通じて異なる墓制が入り込むのではない、あるいは関連集落（有力集落）間に交通路が存在するのではないかとの2つの視点からさらに考察を進めたい。

まず関連集落の問題については、第2章で袋井市域については大規模横穴群の付近には有力集落を含む集落群が存在することを指摘した。すなわち宇刈横穴群（2、以下遺跡などの括弧内の番号は第34図に示したものである）については稲荷領家遺跡（51）、菅ヶ谷横穴群（5）は坂尻遺跡（54）、大規模群集墳ではあるが長者平古墳群（20）については掛の上・大門遺跡（53）が該当しそうと考えてみた。また、これら有力集落遺跡は、奈良時代に至ると坂尻遺跡が佐野郡の郡衙、稲荷領家遺跡が周智郡？の郡衙、掛の上・大門遺跡が山名郡？の郡衙に比定する可能性がでてきていることから、ルート1・2が奈良時代での郡衙遺跡を結ぶ有力ルートとして注目されるし、今回の検証が正しいならば奈良時代の主要幹線路であるはずの2つの交通路の確立は、少なくとも古墳時代後期に遡らせることも十分に可能となってくる。

では、掛川市域と菊川町域での状況どうであろうか。残念ながらこれら地域の集落跡の発掘調査がまったく進んでいないためなんともいえない状況であるが、菊川上流域の大瀬ヶ谷・山本横穴群（7）、杉森・長池横穴群（8）、東平尾・政所横穴群（9）などの大規模横穴群が密集する地域には、実態が明らかではないものの沖積地には豆尻遺跡や白岩遺跡などの古墳時代に該当する集落群が形成されているため、いづれこの辺りから古墳時代後期の有力集落が発見されるのではないかと予測される。菊川下流域にも大規模横穴群である毛森山横穴群（10）が存在する。今回の交通路から唯一離れた大規模横穴群ではあるが、東遠江のうち小規模横穴群の点在する浜岡町や相良町の横穴群と、菊川上流域の大規模横穴群の集団、あるいはその集落を結ぶ交通路中継地点、または海からの交通路との中継地点の位置づけなどが考えられ、今後大いに注目していきたい横穴群である。

さて、肝心のルート1と2の合流点付近に位置する大規模横穴群である飛鳥横穴群（4）と大谷代横穴群（6）、原野谷川上流域の楠ヶ谷横穴群（3）に関係した集落群の実態は全く不明といわざる

を得ないため、残念ながら今後の調査例の増加に期待するしかない。

横穴分布地帯以外ではまず注目されるのはルート1に関係した磐田原東南端に展開する大規模後期群集墳地帯(21・22)は長江崎遺跡(52)や付近の鎌田・鍛影遺跡、あるいは官衙的遺構が発見された犬間遺跡などの集落群が注目される。鎌田・鍛影遺跡などでは奈良時代の郡寺院であると日される大草寺の存在(磐田市教育委員会 1987)などからみると、磐田郡の中心のひとつになる地域といえる。磐田原南西端に存在する大規模後期群集墳(23・24)の関連集落の状況はまったくわからないが、古墳時代後期の天竜川の流路が分からない状況下で、現在の浜松市域の天竜川下流域の集落群との関係を考えるよりも、御殿・二之宮遺跡や大宝院廃寺など同レベルの遺跡が登場した要因、それを支えた集団が何であったのか、そのあたりを注目していきたいところである。

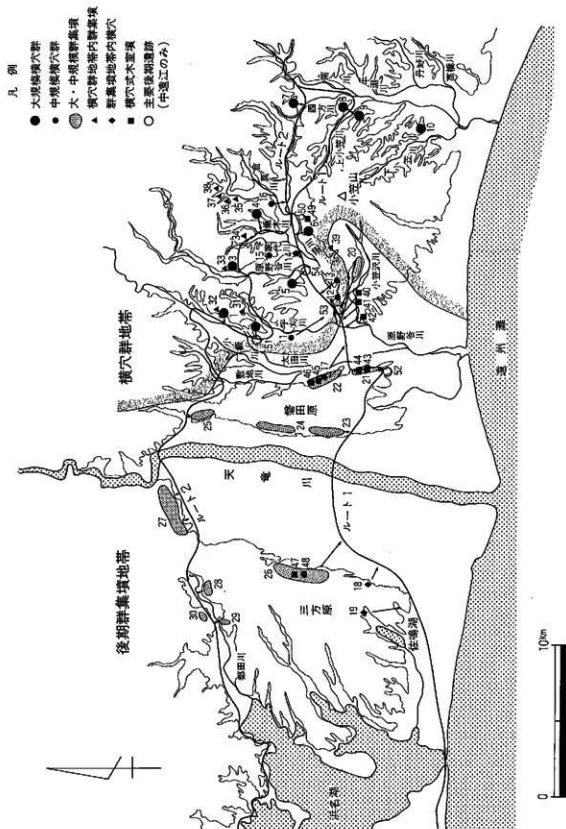
ルート1に関係した三方原東南端に分布する大規模後期群集墳である平田山・瓦屋西・地藏平古墳群(26)の関連集落については、天竜川下流域の飯田遺跡群、市野遺跡群、木船遺跡群などが該当しできそうであるが、史態については何れも不明である。ただし木船遺跡では白鳳期に建立されたと思われる木船廃寺が存在していることから、付近に郡衙レベルの遺跡の存在が予想される。ここで、問題となるのは数知郡衙遺跡である伊場・城山遺跡の古墳時代後期段階の群集墳が特定しえないことである。付近での大規模群集墳は今のところ確実なものは見当たらないため、中遠江地域とは異なる状況下で成立した郡衙であるとも考えられるが、平田山古墳群との関連も含めて、今後の検討課題としては重要である。

一方ルート2に関係した浜北市の北麓古墳群(27)の該当集落の状況は全く不明であるが、ルート2の天竜川の渡河地点に存在する向山遺跡や、鹿玉郡衙と推定される清水遺跡などの今後の調査に注目していきたい(松井一明 1989)。ここで注目したいのは、ルート2の横穴群地帯に接し、天竜川の渡河地点に関係した天竜川東岸の大規模後期群集墳である新平山・上神増古墳群(25)である。新平山古墳群での最近の発掘調査では大形の横穴式石室や、飾り大刀(頭椎大刀)を出土する古墳などを含み、有力な後期群集墳であることが明らかにされた(柴田稔 1993)。付近に分布する上神増古墳群の中にも大形の横穴式石室を含む後期古墳が存在し、今後の発掘調査の状況如何では、さらに重要な位置を占めてくる古墳群になると予測される。

ルート2に関係した都田川流域の後期群集墳の動向は、大規模になるものは少ないが恩塚山古墳群(29)、谷上古墳群(28)、占影古墳群(30)などが中規模後期群集墳として知られ、さらに流域の小規模古墳群を統合すると、浜北市北麓古墳群と同様な大規模後期群集墳といえるものになるだろう。それぞれの群集墳の関連集落遺跡はまったく不明といわざるをえないが、都田川下流の浜名湖河口付近において井通遺跡が最近の発掘調査で引佐郡衙に比定され(細江町教育委員会 1996)、都田川下流域における古墳時代後期の有力集落の動向が注目されるようになってきている。

このように関連集落の状況を見ると、第2章で述べたように奈良時代の郡衙推定遺跡がそれぞれのルートに乗ってくることは理解されるが、はたしてこれらの郡衙推定遺跡の前段階である古墳時代後期の有力集落(居館集落)が重なるのかどうか、発掘調査で証明されねばならないだろう。しかし、後期古墳群・横穴群と関連集落群との比較検討は資料不足のため、今回の2ルートの検証のための決定的な証拠資料とはならなかった。となれば、横穴群地帯のなかの後期群集墳の分布状況、反対に後期群集墳地帯のなかでの横穴群の分布状況、また以前考察した横穴式石室の分布状況から、異なる墓制が他地域圏へ点在することが人的交流の証明になると思われ、さらに考察を進めてみたい。

まず横穴群地帯内の横穴式石室をもつ古墳の分布を検討したい。後期群集墳地帯に近い観音堂横穴群の近くには比較的まとまったものとして崇信寺古墳群(32)がある。崇信寺古墳群は9基からなる



第34図 遠江における古墳時代後期の交通路復元図

群集墳で、そのうち12号墳は6世紀前半築造の木棺直葬墳であるが、10号墳は片袖式の横穴式石室をもち6世紀中頃に日される金銅装の馬具が出土する有力古墳(首長墓)、14号墳は7世紀代の築造の横穴式石室墳であった(森町教育委員会 1996)。宇刈横穴群の隣接地には、7世紀前半築造の横穴式石室墳である三沢2号墳(31)が発掘調査されている(袋井市教育委員会 1991)。さらに、ルート2にそって東に目を転ずると、楠ヶ谷横穴群の隣接地には6世紀後半築造の長副寺古墳(33)、飛鳥横穴群より北方には7世紀中頃に築造された天段1号墳と2号墳(34)、ルート2からはやや離れるがさらに東側の倉真川支流上流域には築造時期は不明ながら平塚古墳(35)、小高古墳(36)、石ヶ谷古墳(37)、美人ヶ谷古墳(38)など単独、あるいは2~3基の少ない基数からなる横穴式石室の古墳群がまとまって分布している状況が読み取れる(掛川市教育委員会 1989)。

ルート1についてはすでに考察した通り長者平古墳群(20)が磐田原南東端の大規模後期群集墳との関係が強い群集墳で、周辺部に横穴群との混在状況を生み出しつつも、太田川東岸では唯一の一大後期群集墳地帯を形成している。その流れはさらにルート1にそって築造時期は不明ながら上山古墳(39)の存在、あるいはさらにルート1の東方、菊川上流域の上の段古墳の存在が注目される。

以上のように横穴群地帯内の横穴式石室墳の進出は首長墓であるが崇信寺10号墳にみられるようにはやくも6世紀中頃に始まるが、主体時期は後期群集墳最盛期の6世紀末~7世紀中頃のもので、しかも長者平古墳群以東のものは、単独ないし2~3基の小基数分布に留まっている。しかし、その分布は、今のところルート1と2に即した場所に、点的に分布するようである。

後期群集墳地帯内での横穴群の分布はどうであろうか。まず磐田原南東端では、ルート1沿いに総数2基からなる向笠西横穴群(17)、大竜川を渡るとルート1沿いに単独の作左山横穴(18)、東嶋横穴(19)が存在している(静岡県教育委員会 1983)。後期群集墳地帯内での横穴群の分布は、今のところルート1沿いに限られ、ルート2沿いにはみられないようだし、群としては単独ないし2基程度のものとなることが確認できよう。とすると、横穴群地帯内での後期群集墳の確認数より、後期群集墳地帯内での横穴の確認数は比較にならないほど極めて少ないものであり、これが各地帯間の人的交流の証とすると、後期群集墳地帯から横穴群地帯への一方向的な人的交流がうかがわれ、少ないながらも横穴群地帯内から後期群集墳地帯内への人的交流は今のところルート1に限られるようである。

このような横穴の動きと一致するかのよう、近年袋井市域でも確認例の増加した横穴式木室が後期群集墳・横穴群の成立と共に太田川東岸地域にも出現する。すでに横穴式木室の動向については考察した(松井一明 1996)が、再度確認すると、(1)横穴式木室はこのところルート1沿いの三方原南東端地域の平田山古墳群(47)と瓦屋西古墳群(48)、磐田原南東端地域の明ヶ島古墳群(43・44)、屋敷山古墳群(45)、権現山古墳群(46)、小笠山西北麓に高尾山古墳群(40)、団子塚古墳群(41)、北山古墳群(42)、さらにルート1に沿って首長墓であるが宇刈ヶ谷横穴(50)を含む堀ノ内古墳群の13号墳(49)に見られ、(2)横穴式木室の構造的な地域色は天竜川以西(遠江Ⅱ・Ⅲ式)と以東(遠江Ⅰ式 以上鈴木敏則分類 鈴木敏則 1991)に顕著な違いが認められ、(3)木室という構造的特徴からみて数回の追葬は不可能で1体ないし2体(夫婦埋葬)の古墳であった可能性が高いことを指摘し、(4)さらに遠江の横穴式木室の成立については伊勢地域の横穴式木室が関係しているらしいこと、ルート1が遠江から伊勢地域へ、さらに畿内に向かっていくことを予測した。まず、横穴式木室の形態的特徴からみると、大竜川以東のものは天井が尖頭形を示し、中遠江地域の初現的横穴に見られる尖頭形の横穴に類似していること、太田川以東で初現的な横穴式木室である堀ノ内13号墳をみると横穴群の中に1基単独に採用された首長墓であった事など、中遠江に成立した横穴式木室は当然伊勢~西遠江からの影響、あるいは人的交流が原因で出現したと思われるが、横穴集団との接触のなかで中遠江

独自の地域性をもった横穴式木室（遠江Ⅰ式）が生み出されてきた可能性も否定できないだろう。

このように、後期群集墳地帯内での横穴、遠江での横穴式木室墳の動向をみると、ルート2よりもよりルート1での人的交流が活発で、しかも西（畿内・伊勢）からの動きが強く見られるし、横穴群地帯内での横穴式石室墳の動きをみると、ルート2沿いの動向も無視できないものがある。

v) まとめ

以上のように長々とルート1と2沿いの数々の古墳時代後期の集落や墳墓型式の交流の動きを検討してきたが、墳墓型式の交流の視点で、ある程度人的交流があったことがいえそうである。しかし、肝心な集落遺跡との交流関係が掴めていないので、はたして正確なラインが引けたかどうか極めて心もとない。なぜなら、ルートの問題は古墳時代中期までの状況と異なり墳墓間ではなく本来集落間に成立しうるものであると考えられるからである。とくにルート2成立については古墳時代中期段階において単独で突如として5世紀後半成立する大蔵市光明山古墳や、5世紀中頃により近い前半に築造される吉岡大塚を始めとする和田岡古墳群の成立と密接に係わっていると思われるからである。すなわちルート1に沿って次々に築造された浜松市の三方原学園古墳群や、遠江で最も有力な首長墓群となる磐田原南東縁首長墓群に対抗する形でルート2が成立したのではないか。吉岡大塚古墳が沖積平野から見えない位置に立地するが、ルート2を吉岡大塚古墳の南側に復元しそれが原野谷川中流域を降下しルート1に合流する仮説が成立するならば、第2章で述べた吉岡大塚に先行する一連の首長墓である豊塚古墳、各和金塚古墳が次々とその沿線に並びうるルートが復元できるのである。

さらに、6世紀前半～中頃のルート2沿いにおいては、遠江では初現期の横穴式石室をもつ首長墓である浜北山興覚寺後古墳、先に述べた森野崇信寺10号墳、ルート1沿いではやはり初現期の横穴式石室をもつ首長墓である磐田市甕塚古墳、袋井市大門大塚古墳が出現し、今回考察した古墳時代後期の2つの交通路成立状況の下地になると考えられるのである。すなわち、この2つの交通路は古墳時代前期末～中期にそれぞれ成立し、6世紀代にも発展的に使われていたことが考えられるのである。また、再三述べるようであるが、奈良時代になると郡衛遺跡の位置関係からみてもこの2つの交通路が主要幹線路として使用され続けていたことはほぼ確実視してもよいだろう。

本論は近年、古墳時代前期～中期の首長墓の位置関係から交通路の復元を試みた、三河～西遠江地域での小林久彦氏の業績（小林久彦 1992）、遠江地域での白澤崇氏の業績（白澤崇 1993）に触発され、古墳時代後期での交通路の問題に論及してみた。しかし、古墳時代前期～中期の交通路の問題は首長墓の性格を交通路の通行人に直接墳墓を見せるという示威行為によるものという前提があってこそ成立する論であるのに対して、今回行った古墳時代後期における交通路の問題は有力（居館）集落と墓域の位置関係から導き出されるもので、より律令期的（中央集権的）な世界での、頻繁な人的交流と物流に関係した交通路の問題にリンクしてくる可能性のほうが高いのではないかと想われた。今回の論をさらに証明していくについては、今更言うまでもないが古墳時代後期の有力（居館）集落の解明に期する部分が大いことを提示し、まとめのこぼれとしたい。

最後になりましたが、冒頭でも述べた通り、今回の報告書をまとめることができたのは、30年以上も前に袋井市が直面していた現在からでは測り知れない困難な状況下で、埋蔵文化財をまづ発掘調査して記録に残そうと努力された地元研究者である大谷純仁・平野和男両氏に負うところが大きい。このような人々の努力と奮闘のおかげで、現在の私達の埋蔵文化財行政が成り立ってきているのだと肝に銘じ、今回の報告書の刊行が少しでもこうした努力への答えとして認知されれば幸いである。

【参考文献】

- 大谷純仁他 1965 「地蔵ヶ谷古墳及び横穴」『埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県教育委員会
- 大谷純仁他 1968 「岡津横穴B群」『埋蔵文化財調査報告』静岡県文化財保存協会
- 小林久彦 1992 「古墳の選地(1)」『研究紀要』創刊号 豊橋市美術館
- 板井清彦 1986 「頭椎大刀の編年」『考古学ジャーナル』No.266
- 白澤 崇 1993 「川会坊山古墳と大門大塚古墳出現の背景」『袋井の前方後円墳』袋井市教育委員会
- 柴田 隆 1993 「考古編」『豊岡村史料編Ⅱ』豊岡村史編さん委員会
- 新納 泉 1983 「裝飾付人刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会
- 新納 泉 1984 「関東地方における前方後円墳の終末」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 鈴木敏則 1991 「横穴式木室葬考」『三河考古』4号 三河考古学会
- 田岡光彦 1984 「いわゆる「素戔の櫛」について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 戸塚和美 1996 「遠江における中世墓の一端―塚墓の墳墓について」『静岡県考古学研究』27号 静岡県考古学会
- 松井 明 1989 「灰輪陶器をつくる人々」『浜北市史通史編』浜北市史編纂委員会
- 松井 明 1989 「宮口古窯群と滑ヶ谷古窯群における須恵系陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 松井 明 1990 「東遠江における古墳時代前期の土器の変遷」『若作遺跡・若作古墳群』袋井市教育委員会
- 松井 明 1992 「宇佐八幡境内遺跡周辺域における5世紀の首長墓と初期群集墳の動向」『宇佐八幡境内遺跡』袋井市教育委員会
- 松井 明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『向坂第二遺跡記念論集 地域と考古学』
- 松井 明 1994 「山田原古墳群に見る群集墳の終末」『山田原遺跡群Ⅰ』袋井市教育委員会
- 松井 明 1996 「高尾向山遺跡の横穴式木室について」『高尾向山遺跡Ⅱ』袋井市教育委員会
- 袋井市教育委員会 1981 『袋井市長者平遺跡』
- 袋井市教育委員会 1986 「愛野山A1号墓」『昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1989 「南門坂古窯跡』
- 袋井市教育委員会 1991 『堀越ジョウヤマ遺跡』
- 袋井市教育委員会 1991 『三沢遺跡』
- 袋井市教育委員会 1992 『宇佐八幡境内遺跡』
- 袋井市教育委員会 1992 『田子塚遺跡―遺構編―』
- 袋井市教育委員会 1994 『山田原遺跡群Ⅰ』
- 袋井市教育委員会 1994 『坂尻遺跡―遺構編―』
- 袋井市教育委員会 1996 『金山古墳群・金山横穴群』(第32岡山典文庫)
- 掛川市教育委員会 1970 『高代山古墳群』
- 掛川市教育委員会 1988 『二十八坪横穴群A群』
- 掛川市教育委員会 1989 『八段古墳・東沢遺跡』
- 磐田市教育委員会 1987 『鎌田・銀影遺跡』
- 磐田市 1992 『極現山遺跡』『磐田市史 史料編1』
- 浜松市遺跡調査会 1984 『半田山古墳群A小支群・半田山Ⅲ遺跡』
- 浜松市教育委員会 1988 『半田山古墳群Ⅳ支群 浜松医科大学内』
- 浜松市教育委員会 1991 『五屋西古墳群』
- 浜松市教育委員会 1989 『浜北市北麓古墳群』
- 藤枝市教育委員会 1980 『市部古墳群山ノ神支群・蔵田古墳群ツツ池支群』
- 浅羽町教育委員会 1992 『羽子塚遺跡(Ⅰ)』
- 森町教育委員会 1992 『飯田の遺跡』(第33岡山典文庫)
- 細江町教育委員会 1996 『井通遺跡』
- 浜岡町教育委員会 1986 『門屋横穴群石田・蓮前支群発掘調査報告書』
- 伊豆長岡町教育委員会 1981 『八木横穴群』
- 静岡県教育委員会 1971 『宇洞ヶ谷横穴墳発掘調査報告』(第32岡山典文庫)
- 静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』(第32・33岡山典文庫)
- 静岡県教育委員会 1989 『静岡県の窯業遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『平尾野浜横穴群』
- 日本楽器製造株式会社 1979 『観音堂横穴群発掘調査報告書』(第33岡山典文庫)

【抄 録】

フ リ ガ ナ	ハチマンヤマオウケツダン					
書 名	八幡山横穴群					
副 書 名	袋井市考古学資料集第3集					
編 集 著 者 名	松井 明					
編 集 機 関 名	袋井市教育委員会					
所 在 地	〒437 静岡県袋井市新屋1丁目1番地1					
発 行 年 月 日	1997年3月19日					
所 収 遺 跡 名	八幡山横穴群 道ヶ谷横穴B群 北の谷横穴 宇刈横穴N群 東別所古墳群					
所 在 地	八幡山横穴群 静岡県袋井市堀越・八幡ヶ谷 道ヶ谷横穴B群 静岡県袋井市久能・張ヶ谷 北の谷横穴 静岡県袋井市堀越 宇刈横穴N群 静岡県袋井市宇刈・三沢 東別所古墳群 静岡県袋井市鷺津・西ノ谷					
コ ー ド	北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因	
市町村	道跡番号					
22216	143	34° 45' 32"	137° 54' 50"	19720400～ 19720630	1500.0㎡	土取り工事
	122	34° 46' 08"	137° 55' 05"	19711031～ 19711108	200.0㎡	宅地造成
	126	34° 47' 15"	137° 54' 50"			未調査消滅
	52	34° 47' 10"	137° 55' 10"	19850215～ 19850217	200.0㎡	研修棟建設
	135・136	34° 45' 28"	137° 55' 25"	19640818～ 19640831	300.0㎡	工場建設
収 遺 跡 名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項	
八幡山横穴群 1～3号横穴	横穴群	古墳時代後期	横穴3基	馬具・鉾り大刀・鉄鏃・刀 子・須恵器	中規模横穴群	
道ヶ谷横穴B群 1～5号横穴	横穴群	古墳時代後期	横穴5基	須恵器・土師器・直刀・ 鉄鏃 横穴群	小規模横穴群	
北の谷横穴群	横穴群	古墳時代後期	横穴4基?	須恵器・土師器	小規模横穴群	
宇刈横穴N群 82～85号横穴	横穴群	古墳時代後期	横穴4基	須恵器・土師器・直刀	大規模横穴群	
東別所古墳群 1・2号墳	初期群集墳	古墳時代中期	前方後円墳1基? 円墳1基	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄 鏃・刀子	小規模群集墳	

袋井市考古学資料集第3集

八幡山横穴群

—袋井の群集墳・横穴群を考える(2)—

発行年月日 1997年3月19日

編集・発行 袋井市教育委員会

〒437 静岡県袋井市新屋1-1-1

☎0538-43-2111

印刷 株式会社 開 明 堂

〒430 静岡県浜松市小沢町1-1



1～9＝八幡山1号横穴出土土器



1



3



5



10



2



4

10～13＝八幡山2号横穴出土土器



7



8



9



12



13

八幡山横穴群遺物写真(1)
※Noは図版Noと一致する。



14



15



16



17

19~23=八幡山3号横穴出土土器



19



20



21



22



23

24・25=八幡山不明横穴出土土器



24



25

八幡山横穴群遺物写真(2)

※Noは図版Noと一致する。



28



31

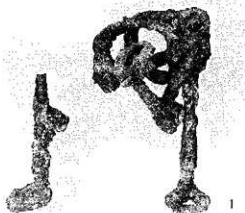


32



35

1～26＝八幡山3号横穴出土鉄器
・干類・耳環



1



20



21



22



23



24



25



26



8



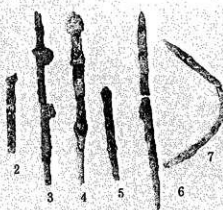
9



11



12



2

3

4

5

6

7



13



14



15



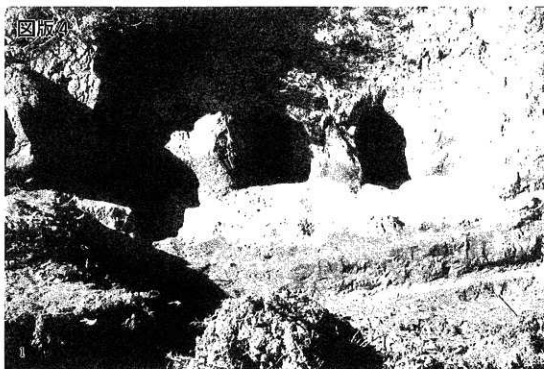
16



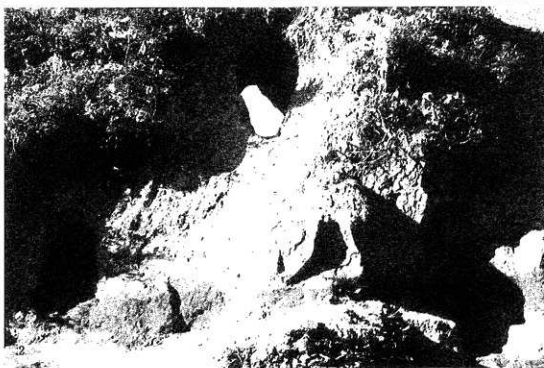
17



18



1. 道ヶ谷B 1～3号横穴（南より）



2. 道ヶ谷B 4・5号横穴（南より）



3. 道ヶ谷B 1～3号横穴（西より）

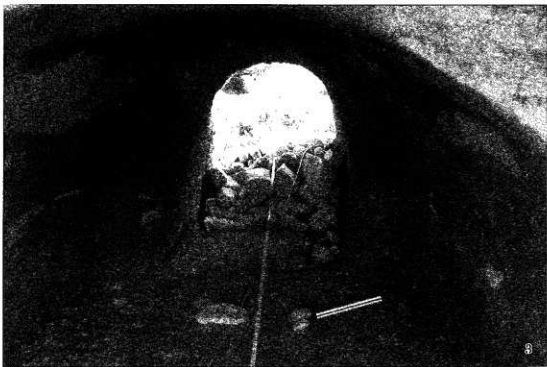
1. 道ヶ谷B1号横
(南より)

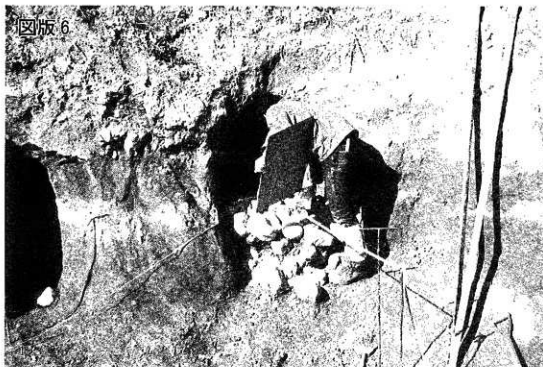


2. 道ヶ谷B1号横穴内部
(北より)

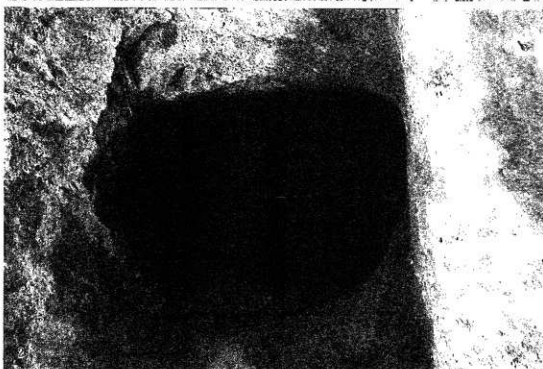


3. 道ヶ谷B1号横穴
(北より)

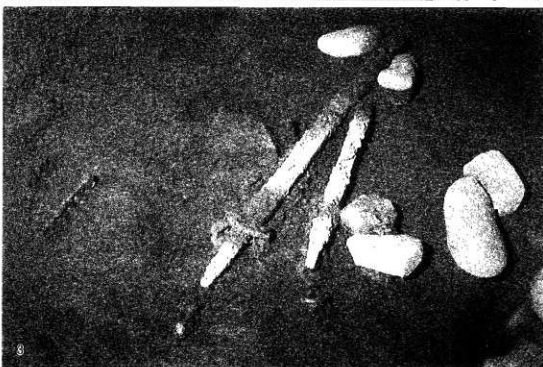




1. 道ヶ谷B 1号横穴調査風景
(南より)

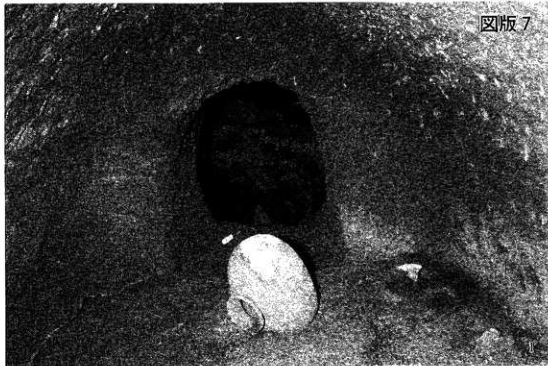


2. 道ヶ谷B 2号横穴 (南より)

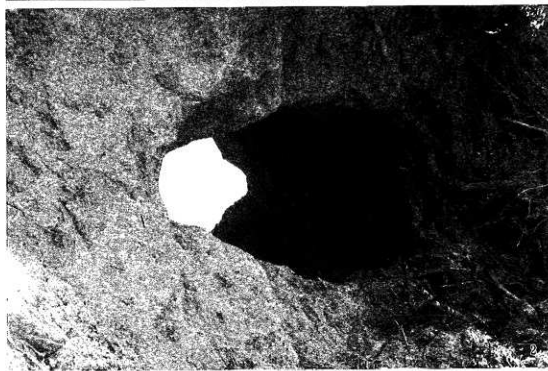


3. 道ヶ谷B 2号横穴内部
(鉄刀出土)

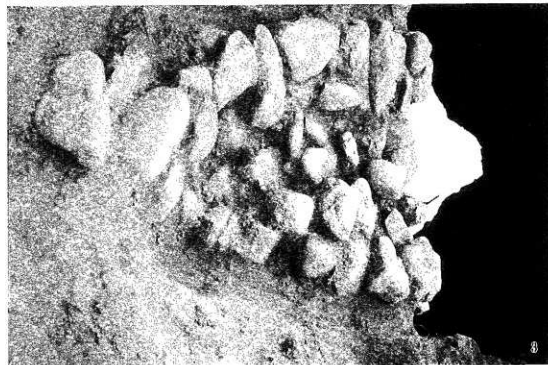
1. 道ヶ谷B 2号横穴内部
(須恵器出土)

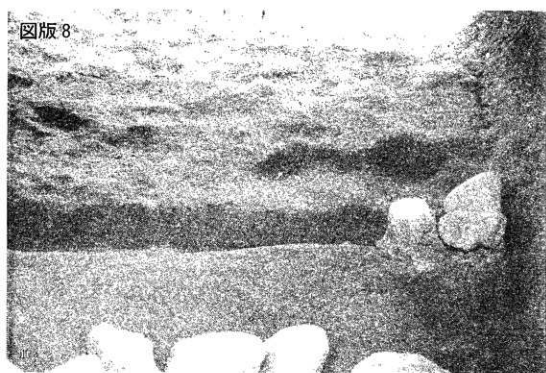


2. 道ヶ谷B 4号横穴
(南より)

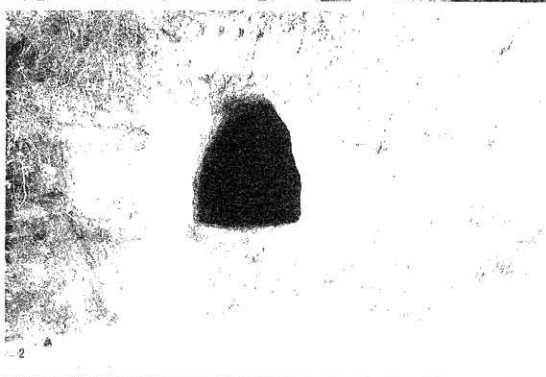


3. 道ヶ谷B 4号横穴閉塞石
(南より)





1. 道ヶ谷B 4号横穴内部
(南より、小溝あり)



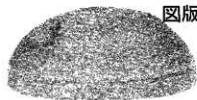
2. 道ヶ谷B 5号横穴 (南より)



3. 道ヶ谷B 5号横穴閉塞石
(南より)



1



3



4



5



6



7



8



9



10



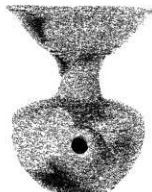
11



12



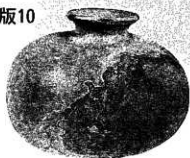
13



14



15



17



18



21



22



16



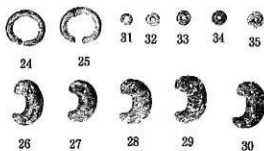
23



24



25



31

32

33

34

35



26

27

28

29

30

16・17=道ヶ谷B 2号横穴出土土器

18=道ヶ谷B 3号横穴出土土器

21~25=道ヶ谷B 5号横穴出土土器

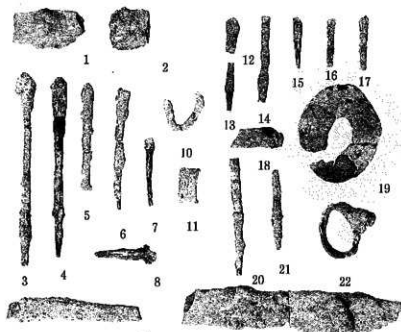
1・2=道ヶ谷B 1号横穴出土鉄器

3~11=道ヶ谷B 2号横穴出土鉄器

12~19=道ヶ谷B 3号横穴出土鉄器

20~23=道ヶ谷不明横穴出土鉄器

24~35=道ヶ谷B 5号横穴出土鉄器
・土類・耳環



1

2

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

道ヶ谷横穴B群遺物写真(2)

※Noは図版Noと一致する。



1



3



4



5



6



7



8



9



10



11



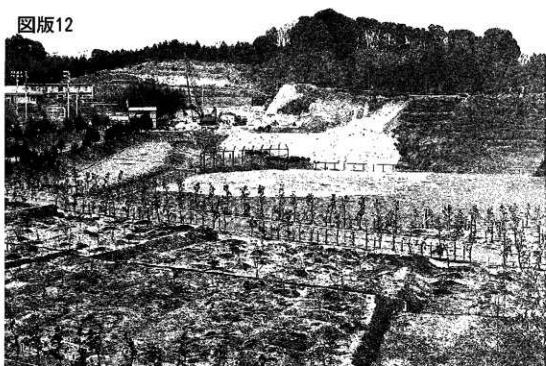
14



15



16



1. 宇刈横穴N群遠景（西より）



2. 発掘調査前（西より）

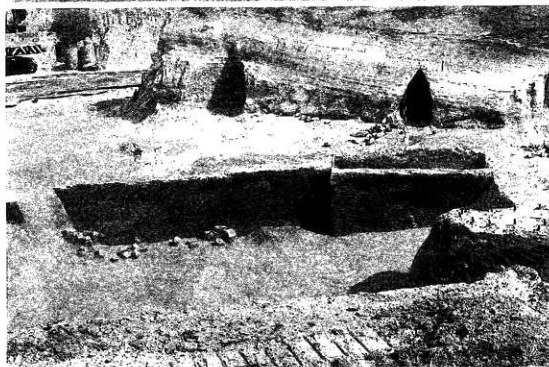


3. 宇刈横穴N群全景（東より）

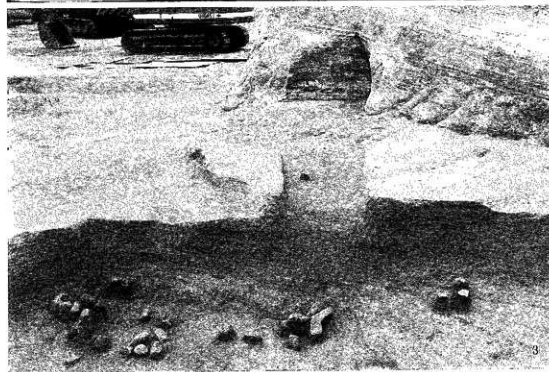
1. 宇刈横穴N群全景（南より）



2. 宇刈横穴N群
前庭部埋土断面（南より）

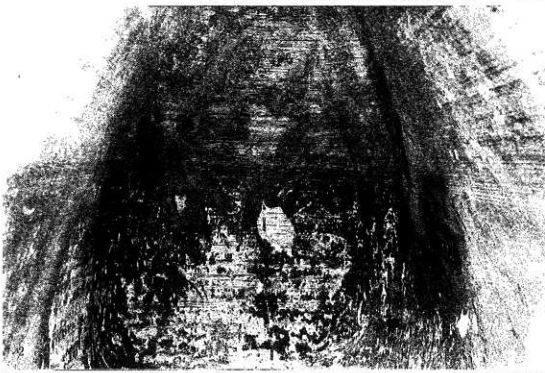


3. 宇刈82号横穴（南より）





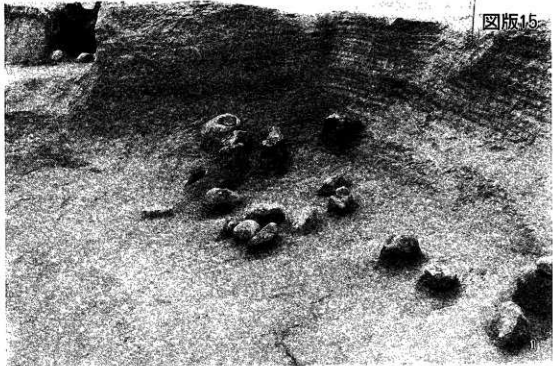
1. 字刈83号横穴（南より）



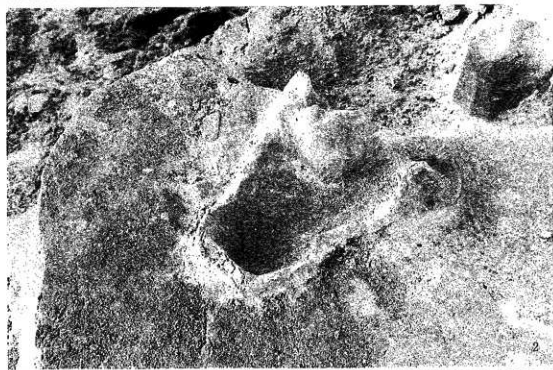
2. 字刈83号横穴壁面
（削只痕が見られる）



3. 字刈85号横穴
（ミニ横穴、南より）



1. 前庭部土器出土状況
(東より)



2. 前庭部土器 (No.9) 出土状況



3. 発掘調査風景 (東より)

1, 3~9 = 宇刈横穴前庭部出土土器

2 = 宇刈82号横穴羨道部出土土器



1



2



3



4



6



7



9

10 = 宇刈82号横穴出土鉄製品

11 = 宇刈不明横穴出土勾玉



5

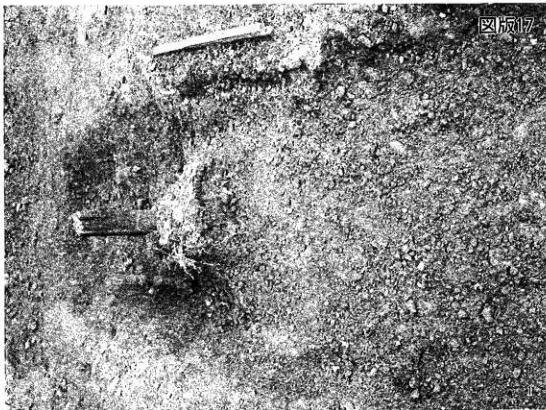


10



11

宇刈横穴N群遺物写真
※Noは図版Noと一致する。



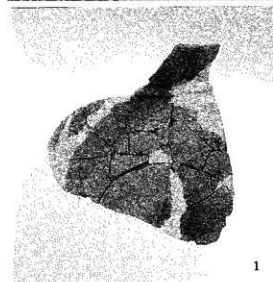
1. 東別所1号墳主体部



2. 東別所1号墳出土鉄製品
(鉄鏃?)

1 = 東別所1号墳出土古式土師器

8 = 東別所1号墳中央主体部
出土鉄鏃



3. 東別所1号墳写真遺物
※No.は図版No.と一致する。